



Title	周堤墓形成期の土器研究：北海道中央部を中心とする縄文時代後期中葉後半期-晩期初頭の編年再構築とその意義
Author(s)	坂口, 隆
Citation	考古学雑誌, 100(2), 28-74
Issue Date	2018-05
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/71058">http://hdl.handle.net/2115/71058</a>
Type	article
File Information	sakaguchi_koukogaku100.2.pdf



[Instructions for use](#)

## 周堤墓形成期の土器研究

—北海道中央部を中心とする縄文時代後期中葉後半期～  
晩期初頭の編年再構築とその意義—

坂 口 隆

### 1. 序

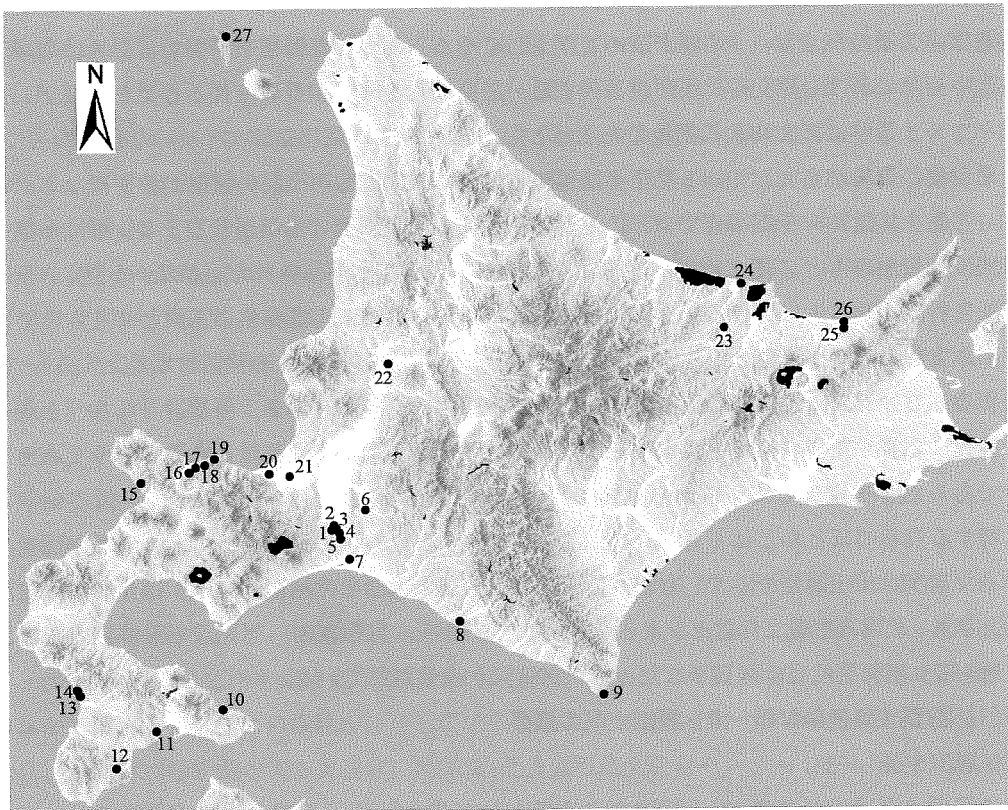
周堤墓とは、墓域を掘削し、その土を周囲に周堤状に盛った墓である。その最大のキウス周堤墓群2号は、外径で約75m、周堤の高さは5.4mある。こうした墓を造成するためには多大な労働力を必要とするため、周堤墓の出現とその形成過程は、縄文社会の進化を検討するうえで最も重要な研究課題である。著者は、現在、周堤墓の出現を縄文時代後期中葉から後葉における地域集団の動態から解明するために下記の研究に取り組んでいる。①地域集団の動態に関する分析、②居住集団の動態に関する分析である。地域集団の動態に関する分析は、北海道中央部(道央)を中心とした広域における集落遺跡、墓地遺跡の時空間的な動態を詳細に調べることで、周堤墓の出現する背景となる縄文時代後期の地域集団の動態について検討することにある。一方、居住集団の動態に関する分析は、住居跡の面積から居住人口を積算し、同時期に所在した住居跡軒数から集落跡における集団の規模や人口動態を追究することである。これらの分析を進めるためには、精度の高い土器編年が確立していることが必須であり、本稿はそのための基礎的研究である。

周堤墓が形成された縄文時代後期後葉の土器編年については、<sup>どうばやし</sup>堂林式→<sup>み</sup>三ツ谷式→<sup>ごてんやま</sup>御殿山式という大枠が定着している(森田1981)。ただし、それぞれの土器型式が意味しているところは、後述するように研究者により異なる。近年の縄文時代後期中葉から晩期初頭の北海道中央部における土器編年も諸説があり(阿部2008, 土肥2001)、錯綜した状況にある。前稿(坂口2014)では、キウス周堤墓群の出現と遺跡形成過程に関連して、北海道中央部における当該期の編年について概略したが、本稿は、前稿を改訂・詳述することで、その編年再構築を意図するものである。

土器の編年学的研究方法には、層位的分析と型式学的分析がある。北海道中央部では、当該期の層位的分析を一貫して実施できる資料には恵まれていない。ただし、縄文時代後期中葉後半期に関しては、<sup>おしよろどぼ</sup>忍路土場遺跡の層位的資料が編年構築に有効である。一方、縄文時代後期後葉～晩期初頭は、層位的資料が欠如するが、型式学的分析に有効である墓坑出土の一括資料が

豊富である。こうした北海道中央部における資料の蓄積状況を踏まえ、本稿では、縄文時代後期中葉後半期に関しては忍路土場遺跡の層位的資料、縄文時代後期後葉後半期～晩期初頭については墓坑出土の一括資料を中心に分析することとした。

本稿では、当該期に並行するより精度の高い編年が確立されつつある東北地方の十腰内式、瘤付土器、亀ヶ岡式の編年と対比しながら北海道中央部の編年を再構築していくという方法を採用する。特に、瘤付土器、亀ヶ岡式は、日本列島の広域にわたり分布するので、北海道中央部のみならず、広域編年を確立するうえで要となる。本稿の主要な分析対象とする北海道中央部も、後述する通り、縄文時代後期後葉後半期～晩期初頭には在来の土器に瘤付土器や亀ヶ岡式の特徴(器形・文様・手法)が顕著に現れる。北海道中央部においても在地の土器と瘤付土器、亀ヶ岡式との共伴関係やその製作手法の受容過程に関する分析が編年再構築を進めるうえで重要な位置を占める。そのため、本稿では、北海道中央部における縄文時代後期後葉後半期～晩



第1図 本稿に関連する北海道の縄文時代後・晩期の遺跡

- 1: 西島松 5, 柏木 B, 柏木川 4 2: カリンバ 3, ユカンボシ E2・E3・E8 3: キウス 1・4 4: 末広  
 5: 美々 4, 美沢 1・2 6: 東三川 7: 柏原 5 8: 御殿山 9: エリモ 10: 白尻 11: 茂辺地  
 12: 湯の里 3 13: 元和 14: 三ツ谷 15: 茶津 16: 沢町 17: 西崎山 18: 忍路土場 19: 鮎洞  
 20: 手稲 21: N30 22: 神居古潭 7 23: 北川 24: トコロチャシ南尾根 25: 朱門  
 26: オクシベツ川 27: 船泊, 浜中 2, ウエンナイボ

期初頭の編年については、瘤付土器と亀ヶ岡式の型式名を「並行期」として採用する。

本稿で縄文時代後期中葉から晩期初頭の編年について検討するのは、周堤墓出現前夜、及び衰退期の地域集団の動態も考慮しているためである。本稿は、前半で当該期の編年について提示し、後半はこれまでの諸説を批判的に検討することで、研究史を整理する。なお、本稿では、北海道中央部の編年を中心に考究するが、北海道北部(道北)・東部(道東)・南部(道南)の関連する遺跡出土品についても合わせて検討する。本稿に関連する北海道内の遺跡の位置を第1図に示す。

## 2. 北海道中央部における縄文時代後期中葉終末期

周堤墓の出現は、従来、縄文時代後期後葉の堂林式期と考えられてきたが、キウス4遺跡の発掘調査成果を総括する中で「周堤墓を含めたキウス4遺跡の遺構群は「<sup>ほっけま</sup>鮎潤式新(末)段階」の土器が使用される時期から造営され」という所見が示された<sup>(1)</sup>(北海道埋蔵文化財センター 2003b: 93)。鮎潤式は、縄文時代後期中葉終末期に位置づけられるので、周堤墓の出現期はいつなのか、という問題が改めて浮上してくる。こうした問題を解明するためにも、北海道中央部における縄文時代後期中葉後半期～後期後葉の編年が整理される必要がある。

キウス4遺跡は縄文時代後期後葉を主体とし、後期中葉に関してはマイナーな遺跡なので、後期中葉の資料が充実している忍路土場遺跡出土品や末広遺跡出土品の検討が必要になる。特に、忍路土場遺跡の発掘調査では、C地区の旧河道、及び斜面の堆積層IV層～IIb層にかけての層位的資料をもとに縄文時代後期中葉から後葉への編年案が示された(第2a・b図)。当層位的資料は、北日本における縄文時代後期中葉後半期における土器編年の基礎となるものであり、本資料の検討が必要となる(ただし、IIIb層出土品は極少量のため検討対象外とする)。後述する通り、忍路土場遺跡の編年案は、同遺跡の層位的資料から本来、再検討されるべき既存の論説に依拠した点に禍根を残す。そのため、本稿では、土器編年の基礎となる調査の1次データである層位を優先して下位から上位の順序で出土品の検討を進める。第2a・b図の編年案に関する資料のほとんどはC地区出土品であるが、A・D地区出土品も一部含まれる。図中のローマ数字は出土層位を示す。なお、「2nd」はIIIc層最上面の生活面、「3rd」はIV層中の生活面とされ(北海道埋蔵文化財センター 1989a: 72・1989c: 306-308)、忍路土場遺跡報告書ではIV層～IIb層の層位とは区別された土器の実測図が掲載されている。

### (1) 忍路土場遺跡IV層～IIb層出土品の概要

#### IV層出土品

IV層出土品は少量の船泊上層式などが混在して出土しているが、<sup>ふなどまり</sup>手稲式<sup>ていね</sup>主体である。船泊上層式の痕跡を残す小波状口縁や頸部に無文帯を配置するもの、及び口縁部無文帯が幅狭い深鉢は後述する手稲式古段階の特徴を有するが(第2b図 28・30・32)、新しい特徴である大波状口縁や口縁部無文帯が幅広な深鉢が主体を占める(第2b図 14・15・21・22)。特に、筒状底部で胴部から口縁部にかけて朝顔状に大きく開く大波状口縁深鉢が特徴的で、波頂、

あるいは波頂間に刻目のない孤状隆帯を施すものもある(第2b図14・15)。小波状口縁は衰退する一方、大波状口縁が発達するので、それに伴い波状口縁の単位は4単位ないし5単位が一般的となる。大波状口縁で幅広い口縁部無文帯を作出することで装飾的な孤状隆帯の配置が可能になったとみられる。筒状底部は無文帯と縄文帯から構成されるものがある(第2b図15)。肩部で屈曲する有文深鉢の文様帯は、口縁部無文帯、胴部文様帯から構成され、胴部文様帯には平行沈線文、磨消文様の横「S」字文などが施される(第2b図14・15)。深鉢と同様に肩部で屈曲する有文の鉢も口縁部無文帯、胴部文様帯から構成される(第2b図29)。

注口土器は3段造りで、胴部に彫刻的な手法で文様を施し、口縁と頸部、頸部と胴部、及び胴部と底部の境に太く深めの沈線を施すので器面に凹凸があるのが特徴である(第2b図44)。注口は長く、太めで基部を突出させるものが多い。

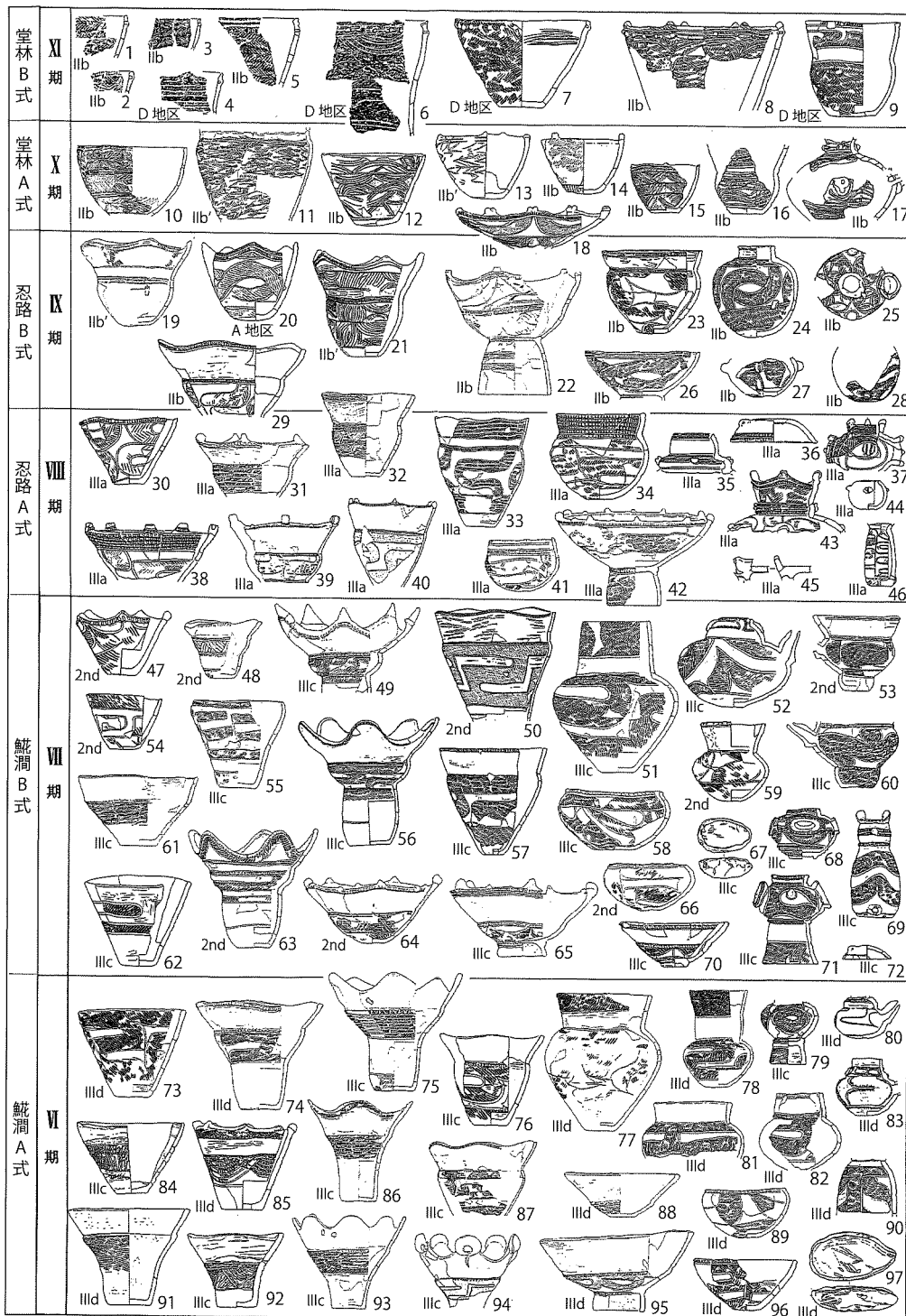
### 3rd 出土品

3rd 出土品は、IV層出土の手稲式と下記の点に共通点を有する。①筒状底部で口縁部無文帯が幅広い大波状口縁深鉢が特徴的である(第2b図1・4・5・10・23)。装飾的な孤状隆帯を口縁に配置する点や、無文帯と縄文帯から構成される筒状底部(第2b図5)もIV層出土品(第2b図15)と類似する。有文深鉢の胴部文様帯には平行沈線文、磨消文様の横「J」字文などが施される。無文(地文縄文のみのもの含む)の深鉢も口縁部無文帯が幅広く、その中には胴部から底部にかけすばまる形態のものもみられる(第2b図3)。②鉢・浅鉢(台付鉢・浅鉢含む)も口縁部無文帯が幅広い点は、深鉢と同様である(第2b図7・25)。③3段造りの注口土器(第2b図9)はIV層出土品(第2b図27・44)と類似する。

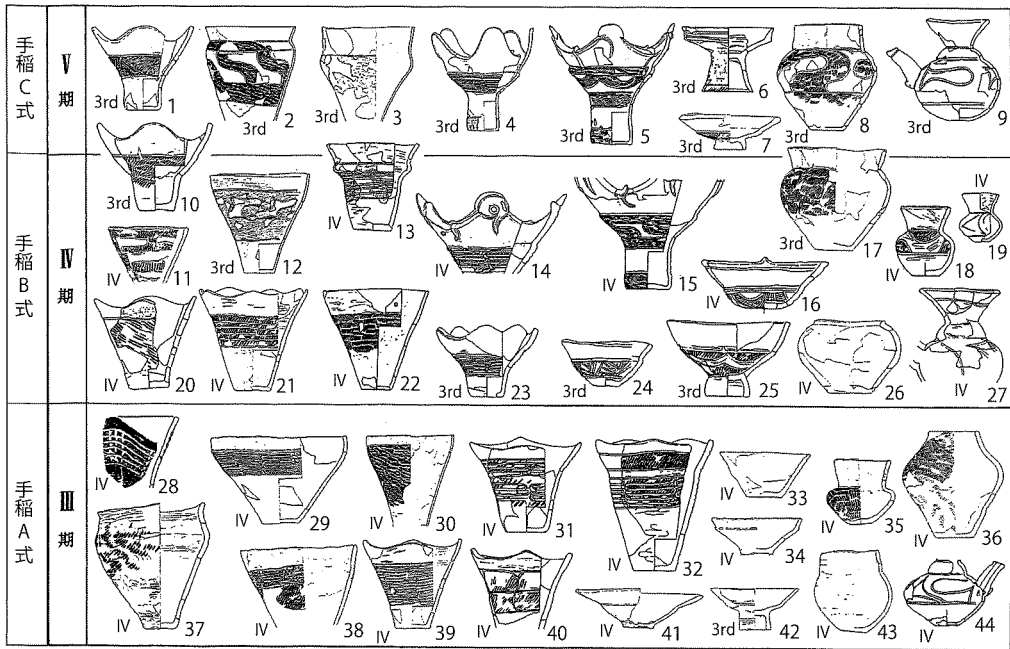
3rd 出土品は、第2b図2など一部、手稲式古段階の特徴を有する資料が含まれているが、IV層出土品よりも後述する手稲式中段階のまとまりが看取される資料である。ただし、磨消文様を施文する有文土器が増える傾向が看取されるので、IV層出土品よりも新相を呈しているとみられる。

### III d 層出土品

III d 層出土品は、IV層・3rd 出土品の器形や文様を継承するが、下記に新しい傾向が看取される。①器種を越えて口端、肩部などに刻目が施されるようになり(第2a図74・80・82・88・89・95・96)、文様を刻目列で縁取りするものが現れる(第2a図83)。②肩部で屈曲し、口縁が外反する2段作りの深鉢が出土している(北海道埋蔵文化財センター1989b:図VI-63-394)。③波状口縁先端が尖る大波状口縁深鉢(北海道埋蔵文化財センター1989b:図VI-63-393)が現われ、弧状隆帯にも刻目が施されている。④広口壺の口縁に縄文帯と無文帯を配置するものが出現する(第2a図77・78)。⑤磨消文様が増える傾向があり、「J」字文の短部が横伸びしたとみられる幅広いクランク文が器種を超えて盛行し始める(第2a図73・74・78・81・82・89)。⑥深鉢、及び鉢口縁に大形突起が出現する(第2a図85)。⑦羽状縄文が出現する(北海道埋蔵文化財センター1989b:図VI-65-404, 図VI-67-417)。



第2a図 忍路土場遺跡編年案(1) (ローマ数字は出土層位を示す)



第2b図 忍路土場遺跡編年案(2) (ローマ数字は出土層位を示す)

その一方で、磨消文様は器種を越えて、ネガ・ポジ文様(高橋 1981)の境を太く陰刻するとともに、ネガ文様を削りポジ文様をレリーフ状に浮かび上がらせる古い手法が看取される(第2a図 74・78・81・82・83・95)。

### Ⅲc 層出土品

Ⅲc 層出土品は、Ⅲd 層出土品と類似する内容であるが、下記のような新しい傾向が看取される。① 肩部で屈曲し口縁が外反する2段造りの深鉢が増える兆候があり(第2a図 57・76・87)、口縁部の文様帯(Ⅱa 文様帯<sup>(2)</sup>)に文様を施すものが現れる(北海道埋蔵文化財センター 1989b: 図VI-52-311)。② 刻目施文は1列が主であるが、2列の刻目が出現する(第2a図 65, 北海道埋蔵文化財センター 1989b: 図VI-51-307)。③ 筒状底部の縄文帯に縄文が施されず、沈線だけ痕跡として残るものが現れる(第2a図 56)。④ 口縁に突起を付けるものが増える兆候がみられ、深鉢の大波状口縁の中には先端部に突起を付けるもの(北海道埋蔵文化財センター 1989b: 図VI-48-283)、あるいは先端部が突起化するもの(第2a図 49)も現れる。⑤ 羽状縄文が施されたものが増加する(第2a図 51)。⑥ 下部単孔土器に瘤、異形土器に瘤状突起が出現する(第2a図 69・71)。

### 2nd 出土品

2nd 出土品は、Ⅲc 層最上面の生活面出土資料のため、その上位のⅢa 層出土品に近似する様相を呈する。ただし、Ⅲc 層出土品に近似する資料(北海道埋蔵文化財センター 1989b: 図VI

-39-232)も含まれ、混在している可能性がある。Ⅲc層出土品から2nd層出土品への変化には、下記の点の特記される。①第2a図63などを除くと、大波状口縁深鉢が衰退する傾向が看取される。②波状口縁深鉢の波頂に付す孤状隆帯は出土していない。代わりに、深鉢、及び鉢の口縁に大形突起が普及する(第2a図47・64)。③口縁部に無文帯を形成する深鉢、鉢の減少が顕著となる。④磨消文様を刻目列で縁取りする手法(北海道埋蔵文化財センター1989b:図VI-41-242・247)や渦状の磨消文様など新しい文様が現れる(北海道埋蔵文化財センター1989b:図VI-41-241・246, 図VI-42-249・251)。また、波状口縁部に三角形の磨り消しを施す装飾手法が現れる(第2a図63)。類似する手法はⅢa層出土品にみられる(北海道埋蔵文化財センター1989b:図VI-34-200・203)。

### Ⅲa層出土品

Ⅲa層出土品は、十腰内3式(小林2015)に対比され、下記の点に大きな変化が看取される。①筒状底部で頸部から朝顔状に開く3段造りの深鉢が激減する。それと相関するように、Ⅲc層～Ⅳ層で出土していた無文帯と縄文帯から構成される筒状底部の深鉢(第2a図75, 第2b図5・15など)が消滅する。一方、肩部で屈曲する2段造りの深鉢が主流となり、頸部に幅狭な無文帯を有するものが出現する(第2a図33)。②口端、頸部に施される刻目は太めで、2列以上の刻目列がやや増える(第2a図34・38)。③深鉢、浅鉢、台付浅鉢で磨消文様の幅広なクランク文、帯状文が多用される(第2a図30・38～41)。また、襷掛け状文(第2a図37)が出現する。その一方で、縦位の孤状文や「S」字文を加えた平行沈線文の衰退がみられる。④浅鉢の高台が発達し、高坏状の器形が出現する(第2a図42)。⑤Ⅳ・Ⅲd・Ⅲc層でみられた底部に磨消文様による連弧文を施した鉢(第2b図16・25, 第2a図65・70)が消滅する。⑥Ⅲd・Ⅲc層で出土していた口縁部が縄文帯、無文帯から構成される広口壺(第2a図51・78)がほぼ消滅するとみられる。⑦口縁部に無文帯を形成する深鉢、鉢が激減する。⑧少数ながら、口縁部の突起に刺突を施すものが現れる(第2a図38・39)。

### Ⅱb'層出土品

Ⅱb'層出土品は、鱗潤式、鱗潤式から堂林式への過渡的資料(第2a図19・21)、及び後述する堂林式1式～2式の資料(第2a図11・13)が含まれ、複数の土器型式が混在している状況である。本層出土品には堂林式の生成と関連して注目される深鉢がある。ツメ状で2列の細い刻目が施された深鉢(第2a図19・21)である。特に、第2a図21の文様帯は、堂林式深鉢の特徴であるⅠ・Ⅱa・Ⅱの3帯構成で、堂林式への過渡的様相を呈する。

### Ⅱb層出土品

Ⅱb層出土品もⅢa層出土品に近似する資料(第2a図18・23～29)と堂林1式～2式に相当する資料(第2a図10・12・15～17)が含まれ、Ⅱb'層と同様に混在している状況である。



## (2) 北海道中央部における縄文時代後期中葉後半期編年の再構築

## 鷹野光行による編年案の再検討

忍路土場遺跡の層位的資料により、各層準には前後する土器型式の混在が認められるものの、縄文時代後期中葉から後葉への土器の詳細な変遷を追うことが可能となり、Ⅲ期～Ⅺ期の編年案が示された(第2a・b図)。Ⅳ層・3rd出土品をもとにⅢ期(手稲A式)、Ⅳ期(手稲B式)、Ⅴ期(手稲C式)、Ⅲd層出土品をもとにⅥ期(鮭澗A式)、Ⅲc層出土品をもとにⅦ期(鮭澗B式)、Ⅲa層～Ⅱb'層出土品をもとにⅧ期(忍路A式)、Ⅸ期(忍路B式)が設定された。Ⅷ期(忍路A式)、及びⅨ期(忍路B式)は、エリモB式(鷹野1978・1981)に相当するとされる(北海道埋蔵文化財センター1989b:213)。

手稲式と鮭澗式の細分が示されたのは画期的であるが、この編年案の大枠は、本来、再検討されるべき下記の論説に依拠している。論説A:刻目列と羽状縄文施文の有無を重視し、平行沈線文に刻目列と羽状縄文を併用されないものを手稲式、併用されるものを鮭澗式とする(鷹野1978・1981)。論説B:突瘤施文を鮭澗式とエリモB式を分離する根拠とし、鮭澗式とエリモB式を前後する土器型式とする(鷹野1978・1981・1982)。

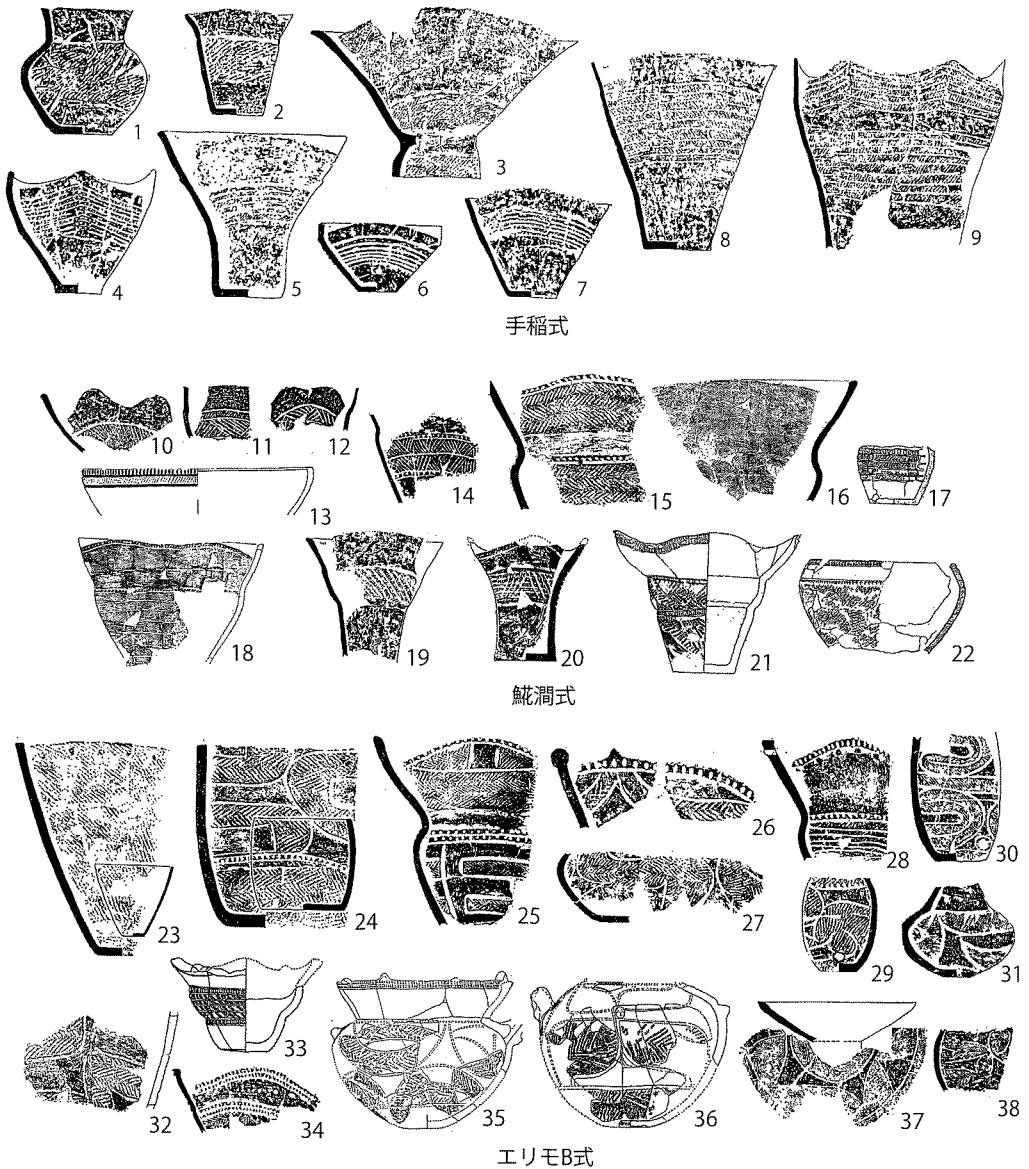
しかしながら、これらの論説には層位的資料や一括資料による裏付けがなく、確固たる論拠があるようにはみえない。そのため、縄文時代後期中葉編年に関する標本図の大幅な改訂がなされたり(第3a・b図)、北・東日本における後期中葉編年の根幹にかかわる広域編年の並行関係が変更されるとみられる(鷹野1982)。むしろ忍路土場遺跡の層位的資料を基礎に据え、上記した論説A・Bこそ再検討されるべきである。

上述の北・東日本における縄文時代後期中葉終末期前後の並行関係の変更は、北海道中央部における後期中葉編年再構築の手掛かりになる。当初、北・東日本における縄文時代後期中葉終末期前後の並行関係は、船泊上層式・手稲式—加曾利B1式、鮭澗式—十腰内遺跡Ⅲ群—加曾利B2式、エリモB式—十腰内遺跡Ⅳ群—加曾利B3式～曾谷式とされていた(鷹野1978)。その後、手稲式は加曾利B2式並行、鮭澗式は加曾利B3式並行と変更された(鷹野1982)。変更の理由は、オクシベツ川遺跡出土の手稲式深鉢(第3b図2)は加曾利B2式に対比されるので、後続する鮭澗式は加曾利B3式並行に繰り下げられた。また、鮭澗式とエリモB式を前後する時期とするため、鮭澗式が加曾利B3式並行に繰り下げられたことでエリモB式も曾谷式以降に並行すると変更された(鷹野1982)。

変更の理由となったオクシベツ川遺跡出土の手稲式深鉢(第3b図2)が、上述した論説Aの手稲式と鮭澗式を判別する同定基準を再検討するうえで鍵となる。この深鉢が加曾利B2式に対比されたのは、その5単位の大波状口縁と胴部の文様施文位置からである(鷹野1982)。これに類似する資料は、忍路土場遺跡Ⅲd層出土品(北海道埋蔵文化財センター1989b:図VI-63-386)、及びⅢc層出土品(第2a図75・93)である。これらの資料は、平行沈線文に刻目列を伴う点、及び器形、波状口縁の形態や波頂単位数が若干、異なる点を除きオクシベツ川遺跡

出土品に類似する。

上述した論説 A の刻目列と羽状縄文施文の有無を重視し、平行沈線文に刻目列、あるいは羽状縄文の併用有無を手稲式と鯨潤式を判別する基準（鷹野 1978・1981）を採用すると、これらの資料は鯨潤式になる（そのため、忍路土場遺跡編年案では第 2a 図 75・93 は「鯨潤 A 式」に位置づけられている）。しかしながら、これらの資料を加曾利 B3 式に対比するのは無理が

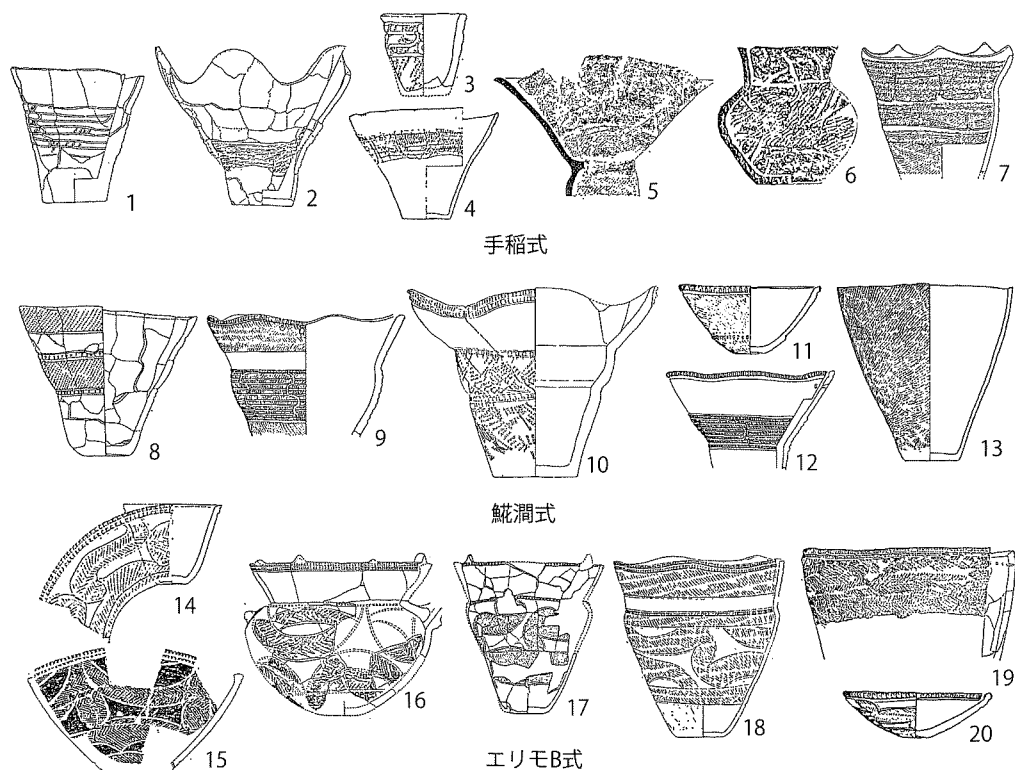


第 3a 図 鷹野光行 (1978) の縄文時代後期中葉に関する編年案と標本図 (縮尺不同)

1~12・19・30・31・34・37・38：手稲遺跡 13：白尻遺跡 14・15・23~29：エリモ遺跡 16：茶津洞窟  
20：船泊第 4 遺跡 18・21・32・33・35・36：トコロチャシ南尾根遺跡 17・22：ウエナイボ遺跡

あろう。手稲式と鮭潤式を判別する基準と鮭潤式—加曾利B3式並行説は齟齬することになる。年代的組織のある地域編年（該期では加曾利B式）をもとに他地域の土器型式を対比しながら編年網を整備していくという方法が学史的に広域編年構築の基礎であることから、忍路土場遺跡Ⅲd・Ⅲc層出土品は、加曾利B2式並行、すなわち手稲式の範疇で理解され、論説Aの手稲式と鮭潤式を判別する同定基準は見直されるべきであろう。

既述の通り、忍路土場遺跡Ⅲd層出土品は、①5単位の朝顔形大波状口縁深鉢が盛行するとともに、波頂に孤状隆帯を付すものも盛行していたとみられる（北海道埋蔵文化財センター1989b：図VI-63-393）。また、孤状隆帯を付す大形破片がⅢd層から出土していることもこのことを傍証する（北海道埋蔵文化財センター1989b：図VI-107-791・793，図VI-108-794～797）。②平行沈線文に縦位の孤状文を加えた文様が盛行している（北海道埋蔵文化財センター1989b：図VI-63-386，図VI-68-425・426，図VI-69-427）。③口縁に縄文帯と無文帯を配置する広口壺が出土している（第2a図77・78）。④口縁部無文帯が幅広な鉢が安定して組成している（第2a図88・95）。⑤太い沈線でネガ・ポジ文様を区画し、ネガ文様を削りポジ文様をレリー



第3b図 鷹野光行（1981）の縄文時代後期中葉に関する編年案と標本図（縮尺不同）

1・2・19：オクシベツ川遺跡 3：西崎山遺跡 4・18：美沢2遺跡 5・6：手稲遺跡 7・14：美沢1遺跡  
8・15・17：元和遺跡 9・11～13・20：美々4遺跡 10・16：トコロチャシ南尾根遺跡

フ状に浮き上がらせる手法が用いられている(第2a図95, 北海道埋蔵文化財センター1989b: 図VI-64-398)。総じて、これら①～⑤は、手稲遺跡出土の手稲式の特徴である。

手稲遺跡出土品は、少量の船泊上層式(大場・石川1956: 図10)、鯨澗式(第3a図30)、幣舞式(大場・石川1956: 図16右端の注口土器)が出土しているが、手稲式のまとまった資料である<sup>(3)</sup>。忍路土場遺跡Ⅲc層出土品もⅢd層出土品と同様に上述した①～⑤の特徴を有することから、手稲式の範疇で理解されるべきであろう。

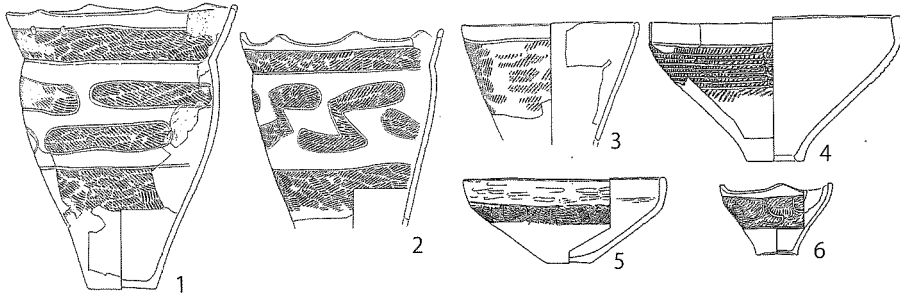
忍路土場遺跡では平行沈線文に刻目列を伴う土器はⅢd層～Ⅲa層(Ⅲb層除く)まで連続と出土している(第2a図31・61・75・93, 北海道埋蔵文化財センター1989b: 図VI-68-425・426, 図VI-69-427, 図VI-53-320, 図VI-46-278, 図VI-38-222, 図VI-26-130, 図VI-25-125, 図VI-24-121)。羽状縄文を施す土器も同様にⅢd層～Ⅱb層(Ⅲb層除く)まで出土している。刻目・羽状縄文施文は、手稲式から鯨澗式への型式変化の方向性を理解するうえでは重要であるが、Ⅲd層～Ⅲa層、あるいはⅡb層までは複数の土器型式に渡することは明らかなので、厳密な土器型式の判定に用いるのは困難であろう。上述した論説Aの手稲式と鯨澗式を判別する同定基準は、手稲遺跡出土の弧状隆帯に刻目が施された深鉢(大場・石川1956: 図25・26)や注口土器(大場・石川1956: 図28の上端2点)が等閑に付された結果生じたものであろう。

また、論説Aを再検討するうえで参考になるのが手稲式に並行する十腰内2式である。十腰内2式の新しい段階に位置づけられる青森県丹後平遺跡8号住居跡床面出土の鉢、及び深鉢(八戸市教育委員会1988b: 図25-7, 図30-2)、田面木平(1)遺跡55号住居跡床面出土深鉢(八戸市教育委員会1988a: 図94-3)には平行沈線文に伴い刻目列が施されているので、手稲式にも平行沈線文と刻目列施文を伴う段階があるとみるのが妥当であろう。

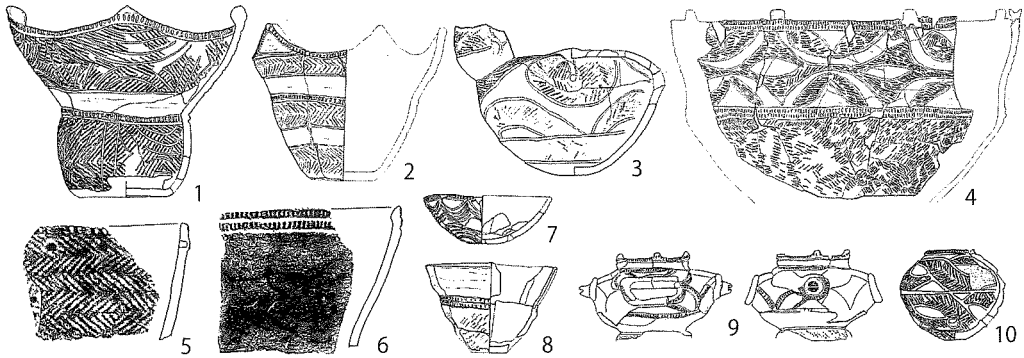
### 手稲式・鯨澗式の再編

近年の蓄積された手稲式の資料を踏まえると、その階梯は、ユカンボシE3遺跡B地点3号堅穴住居跡出土品(古段階)→忍路土場遺跡3rd出土品(中段階)→忍路土場遺跡Ⅲd層出土品(新段階古相)→忍路土場遺跡Ⅲc層出土品(新段階新相)という変遷が指摘される。ユカンボシE3遺跡B地点3号堅穴住居跡出土品(第4図)は、住居跡中央の半径4mほどの範囲からまとめて出土し、しかも第4図の3～6は集中するとともに、4の一部は2と集中して検出された一括性の高い資料である(恵庭市教育委員会1992)。その特徴は、①深鉢は胴部がやや丸みを帯び、短めの口縁は強く外反する器形で口縁部無文帯は幅狭である(第4図1・2)。第4図1の小波状口縁は6単位、第4図2の小波状口縁は7単位で、単位数はやや多い傾向が看取される。②胴部の幅広なⅡ文様帯には、磨消文様で「S」字文や、楕円状の文様が施される点にある(第4図1・2)。器形、文様ともに先行型式の痕跡がうかがえ、手稲式かむいこたんの古段階に位置づけられる。

このような手稲式の古段階の特徴を有する資料は、神居古潭7遺跡一括No.1出土品などが該当する。神居古潭7遺跡は、該期の代表的な遺跡で、遺物包含層から縄文時代早期～晩期の資料が出土しているが、主体となるのは手稲式かむいこたんの古段階である。特に、1991・1992・1994



第4図 ユカンボシ E3 遺跡 3号住居跡出土品 (S=1~3: 1/12, 4~6: 1/8)



第5図 末広遺跡 52号竪穴住居跡床面出土品 (S=1~3, 7~10: 1/8, 4: 1/12, 5・6: 1/6)

年度調査出土品は該期のまとまりが看取される好資料である（旭川市教育委員会 1992・1993・1995）。その中でも 1994 年度調査の一括 No.1 出土品は、E7 グリッド出土で時期的なまとまりが高い資料とみられる（旭川市教育委員会 1995：図 27-2，図 34-2，図 37-6，図 38-1，図 39-1）。その特徴は、有文・無文の深鉢（旭川市教育委員会 1995：図 27-2，図 34-2）にかかわらず口縁部無文帯が幅狭な点や、短めの口縁が外反する深鉢の器形（旭川市教育委員会 1995：図 39-1）にあり、ユカンボシ E3 遺跡 B 地点 3 号竪穴住居跡出土品と共通点を有する。

これら手稲式古段階に後続するのが忍路土場遺跡出土品であり、3rd 出土品→Ⅲd 層出土品→Ⅲc 層出土品という階梯で鮎澗式への変遷が理解される（既述の通り、Ⅳ層出土品の主体となる手稲式は、3rd 出土品と近似する内容であり、Ⅳ層・3rd 出土品をもとに手稲式の細分を提示するのは困難であろう）。Ⅳ層～Ⅲa 層にかけて、上層にいづくにつれ漸移的に平行沈線文よりも磨消文様が増える傾向が看取されることから、手稲式から鮎澗式への変遷は、器形の変化とともに平行沈線文から磨消文様に文様装飾の重点が移ることにあると大筋理解される。上述した手稲式古段階、中段階、新段階は、各段階が手稲式における 1 階梯を占めるので、それぞれを手稲 1 式、手稲 2 式、手稲 3 式とすることを提唱したい。手稲 1 式は先行型式の特徴を継承する段階、手稲 2 式は手稲式として発達する段階、手稲 3 式は鮎澗式への移行期として位置づけられる。既述の通り、忍路土場遺跡Ⅲc 層出土品は、Ⅲd 層出土品と比べ、新しい特

徴を有する資料が含まれるので、Ⅲd層出土品を手稲3式古相、Ⅲc層出土品を手稲3式新相として理解したい。

鯨澗式が提唱された標識資料(名取・松下1969:図3)は、帯状文幅が厚めであることと、口端・頸部の刻目が1列で太めであることから、忍路土場遺跡のⅢa層出土品に対比可能な資料とみられる。鯨澗遺跡の標識資料は断片的であることから、忍路土場遺跡Ⅲa層出土品を鯨澗式の標識資料に位置づけたい<sup>(4)</sup>。Ⅲa層出土の深鉢は、①肩部で屈曲する堂林式深鉢の文様帯の特徴であるⅠ・Ⅱa・Ⅱの3帯構成を取るものがないこと、②肩部で屈曲する深鉢は頸部に無文帯を設けるものは少数であること、③深鉢口端、頸部に施される刻目は1列で太めのものが多用されること、④深鉢、浅鉢、台付浅鉢で磨消文様の幅広なクランク文、帯状文が多用されることから、堂林式とはヒアタスがあり、鯨澗式でも古い段階に位置づけられる。

鯨澗式の新しい段階、すなわち堂林式への過渡的資料には、千歳川流域の末広遺跡52号堅穴住居跡床面出土品が該当するとみられる(第5図)。本堅穴住居跡床面からは、縄文帯と無文帯を交互に配する4単位の大波状口縁深鉢(第5図2)、口縁と胴部に弧線文を配する4単位の波状口縁深鉢(第5図1)、異形台付土器(第5図9)、異形土器(第5図3)、2段構成の襷掛け状文を配する下部単孔土器(第5図10)、磨り消しによる七宝繫状の文様が施された鉢(第5図4)などが出土している(千歳市教育委員会1982)。本堅穴住居跡床面出土品は、①深鉢、鉢、浅鉢に沈線文の盛行する兆候がある点(第5図1・4・7)、②刻目が細くなる点(第5図4・6・7・9)、③突瘤土器(第5図5)が出土している点、④肩部で屈曲する深鉢・鉢では口縁に文様を施す土器(第5図1・4)が出土している点にキウス4遺跡盛土下位出土品(北海道埋蔵文化財センター2003a)への過渡的様相がみられる。特に、第5図1の文様帯はⅠ・Ⅱa・Ⅱの3帯構成を取るとともに頸部に無文帯を配置し、肩部で屈曲する堂林式深鉢の文様帯構成を胚胎した注目される資料である。

末広遺跡では、鯨澗式の新しい段階前後とみられる突瘤土器が14号堅穴住居跡覆土2層下面、48号堅穴住居跡(層位不明)、52号堅穴住居跡(層位不明)からも出土しているが(千歳市教育委員会1982:図300-4, 図343-11・12, 図349-12)、少数例であることから普及するまでには至っていないとみられる。突瘤施文は鯨澗式とエリモB式を分離する根拠とされたが(鷹野1978・1981・1982)、鯨澗式には少数ながら突瘤が出現しているので、論説Bの根拠は消滅したことになる。キウス4遺跡F・G地区建物19からは、7個体の半完形深鉢が潰れて重なった状態で出土しているが(北海道埋蔵文化財センター2001:図232)、この内5個体に突瘤が施されている(第6図1・2・4~6)。この中には、口端、頸部に刻目列が施された5単位の大波状口縁深鉢が2個体あり、内1個体は突瘤が施されている(第6図1)。この一括資料からすると、千歳川流域では鯨澗式直後に突瘤手法が普及するとみられる。この前後には、突瘤を施す深鉢と施さない深鉢が並存していたのであろう。千歳川流域では、末広遺跡52号堅穴住居跡床面出土品からキウス4遺跡F・G地区建物19出土品への変遷が認められる。

### エリモ B 式の再検討

先に忍路土場遺跡Ⅲa層出土品を鯨潤式の標識資料に位置づけることを提言した。Ⅲa層出土品は、忍路土場遺跡編年案ではⅧ期(忍路 A 式)とされる。Ⅷ期(忍路 A 式)と後続するⅨ期(忍路 B 式)は、エリモ B 式に相当するとされるので、次に、論説 B にかかわるエリモ B 式について検討する。エリモ B 式は、当初、エリモ B 遺跡、トコロチャシ南尾根遺跡、手稲遺跡出土品を標識資料としていた(第 3a 図 23~38)。エリモ B 遺跡 1 号住居跡出土品(第 3a 図 25・28、大場・扇谷 1953: 図 32~34)、5 号住居跡出土品(第 3a 図 14・15・26・27、大場・扇谷 1953: 図 16~24)、9 号住居跡出土品(第 3a 図 23・24・29、大場・扇谷 1953: 図 27~30)は、各住居跡出土品に時期的なまとまりが看取される。それらの特徴は下記の点にある。①深鉢では頸部に無文帯が形成される(第 3a 図 25)。②器種を越えて文様帯は幅広で、「コ」字文や逆「コ」字文、クランク文の磨消文様が多用される(第 3a 図 24・25・27)。③口端、頸部に施される刻目は 1 列で太めのもので多用される(第 3a 図 25・26・28・29)。忍路土場遺跡の層位的資料と比較すれば、Ⅲa層出土品(鯨潤式古段階)に対比できる。

一方、トコロチャシ南尾根遺跡と手稲遺跡出土品には、手稲式(第 3a 図 31)、鯨潤式(第 3a 図 30・33)、後述する堂林 1 式(第 3a 図 35・36)が含まれる。改訂されたエリモ B 式標本図には、鯨潤式(第 3b 図 14・15・17・18・20)、堂林 1 式(第 3b 図 16・19)が含まれる。このようにエリモ B 式は、時空間的に多様な資料を含む。当初の標本図は手稲式~堂林 1 式、改訂された標本図は鯨潤式~堂林 1 式の階梯に解消される。既述の通り、突瘤施文は鯨潤式とエリモ B 式を分離する根拠とされたが(鷹野 1978・1981・1982)、鯨潤式には少数ながら突瘤が出現しているので、鯨潤式とエリモ B 式を分離する根拠も消滅したことからエリモ B 式、及びそれに相当するとされる忍路 A 式と忍路 B 式を用いる必要性もないであろう。

既存の手稲式と鯨潤式を判別する基準やエリモ B 式が清算されれば忍路土場遺跡の層位的資料や、手稲式から鯨潤式への変化とそれに対応する北日本の並行する土器群との関係もスムーズに理解される。要約すれば、忍路土場遺跡の層位的資料は、3rd—手稲 2 式、Ⅲd 層—手稲 3 式古相、Ⅲc 層—手稲 3 式新相、Ⅲa 層—鯨潤式として再編される。縄文時代後期中葉終末期における他地域との各細分段階の編年対比については今後さらに詳細な検討が必要であるが、手稲式から鯨潤式への変化は十腰内 2 式から十腰内 3 式への変遷と大よそ連動するものとみられ、手稲式—十腰内 2 式(関根 2013)、鯨潤式—十腰内 3 式(小林 2015)との並行関係を想定することで整理される。

### 3. 堂林式

忍路土場遺跡が形成された主体となる時期は縄文時代後期中葉であることと、堂林式が出土した層準(Ⅱb'・Ⅱb 層)では鯨潤式と堂林式が混在しており、後期中葉から後葉への階梯が判然とするまでには至らなかった。キウス 4 遺跡は堂林式の古い段階から新しい段階まですべて

出土しており、特に、堂林式の古い段階は、キウス4遺跡の調査によりその様相が明らかになった。後述する通り、これまでの蓄積された研究と資料で堂林式の階梯はキウス4遺跡F・G地区建物19出土品→<sup>かしわぎがわ</sup>柏木川4遺跡「氾濫原」出土品→<sup>はまなか</sup>浜中2遺跡R地点V層出土品→瘤付土器第Ⅲ段階並行期に伴う堂林式の4階梯が指摘できる。縄文時代後期中葉の特徴を継承するキウス4遺跡F・G地区建物19出土品は堂林式の古い段階、柏木川4遺跡「氾濫原」出土品は中位の段階、浜中2遺跡R地点V層出土品は堂林式の終末に近い資料なので新しい段階に位置づけることができる。

既述の通り、末広遺跡52号堅穴住居跡床面出土品（鮫澗式新段階）→キウス4遺跡F・G地区建物19出土品を指摘した。キウス4遺跡F・G地区建物19出土品は良好な一括資料であるが、器種は深鉢に限られるので、同時期の資料から器種組成を類推する必要がある。F・G地区建物19出土品と同時期とみられる資料は、キウス4遺跡R地区盛土下位W-3層、V-3層出土品などに前後する時期の土器が混在するものの、ある程度まとまりが看取される（北海道埋蔵文化財センター2003a：図Ⅳ-151・152、図Ⅳ-174～176）。これらの資料は、大きくF・G地区建物19出土品と柏木川4遺跡「氾濫原」出土品に並行する段階の2時期の資料が主体とみられ、柏木川4遺跡「氾濫原」出土品に並行する段階の資料を差し引けば、堂林式の古い段階が明らかになるであろう。さらに北日本の縄文時代後期中葉終末期は、鮫澗式—十腰内3式（小林2015）の並行関係が指摘される。また、北東北地方における当該期前後の並行する土器群は十腰内3式→十腰内4式古段階が判明している（小林2015）。堂林式の古い段階は、十腰内4式古段階との並行関係が想定され、十腰内4式古段階と対比しながら時期幅のあるキウス4遺跡R地区盛土下位層準（W-3層、V-3層など）出土品から堂林式の古い段階の資料を見極めることが課題となる。

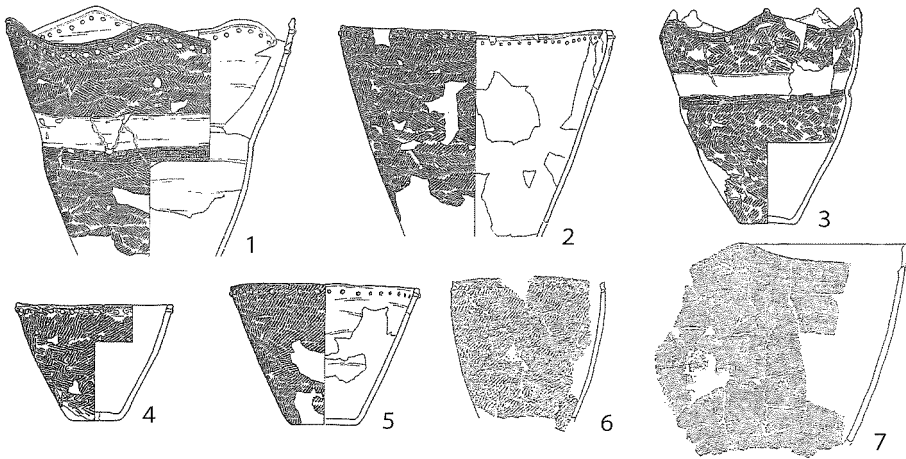
本稿では、上述の堂林式の古い段階を堂林1式、中位の段階を堂林2式、新しい段階を堂林3式とすることを提唱する。この細分案は、土肥（2001）と阿部（2008）の論考を参照したものである。本章では、堂林1～3式について検討し、瘤付土器第Ⅲ段階並行期に伴う堂林式については、次章で後述することとする。

### （1）堂林1式

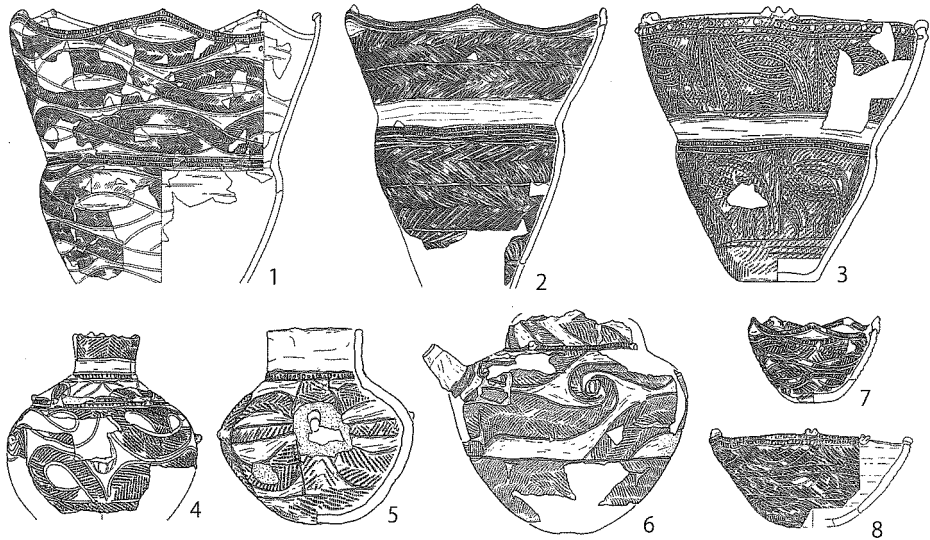
既述のキウス4遺跡F・G地区建物19出土、7個体の半完形深鉢（第6図）が当該期の一括資料であり、キウス4遺跡R地区盛土下位層準出土品などから柏木川4遺跡出土品に並行する段階の資料を差し引くことで代表的な資料を抽出したのが第7図である。当該期の特徴を器種ごとにまとめると下記の通りである。

壺と注口土器は未分化で、その器形は、胴部が球状で、口縁が短めで弱く外反するか、垂直に立ちあがる2段造りのものが多いが（第7図5）、3段造りが形骸化したものもみられる（第7図4）。胴部が球状で、やや長めの口縁が内傾する後期中葉的な器形もみられる（北海道埋蔵文化財センター2003a：図Ⅴ-169-1385）。口端・頸部などに刻目列を伴うものが一般的とみられ





第6図 キウス4遺跡建物19出土品 (S=1/12)



第7図 キウス4遺跡F・G地区、及びR地区出土品 (S=1・2:1/12, 3~8:1/8)

(第7図4~6), 口縁部に縄文帯が施されるものもしばしばみられる(第7図4)。注口は手稲式, 鯰潤式のものに比べ, 短めになり, その基部の膨らみも矮小化する傾向がある(第7図6)。胴部のⅡ文様帯は幅広なので, 文様が大柄で, 整然としたネガ・ポジ文様手法で襷掛け状文, 入組带状文, 弧状文などが施文されるのが特徴である。入組带状文は, 瘤を中心に入り組む構図がしばしばみられる(第7図6)。貼瘤は, 後期中葉から出現するが, 当該期に普及する(第7図4~6)。壺・注口土器の土器製作において, 十腰内4式古段階と共通した器形, 手法(刻目列・貼瘤), 文様(襷掛け状文, 入組带状文)が用いられる時期といえる。

肩部で屈曲する深鉢は, 屈曲する位置は器高の中央近くにあり, 口縁部が幅広で頸部に狭めの

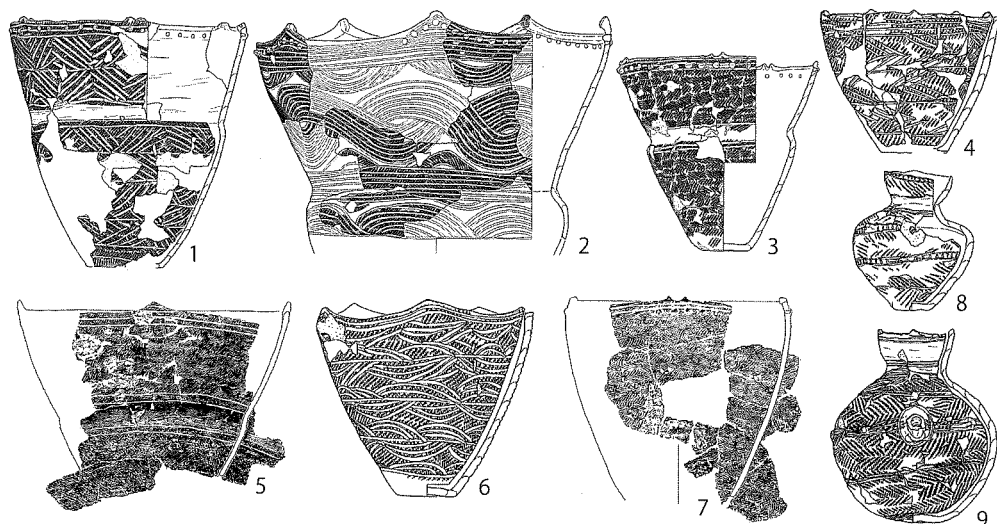
無文帯を配し、口端・頸部に刻目列を施すのが特徴である（第6図1・3、第7図1～3）。並行型式である十腰内4式古段階の屈曲する深鉢にも刻目列がみられるので、北日本の縄文時代後期中葉に後続する段階では刻目列を施す手法が継承されたとみられる（小林2015）。既述の通り、キウス4遺跡F・G地区建物19出土の一括資料には、5個体に突瘤が施されているが、施さないものもあるので、両者は並存していたことを示唆する。大波状口縁や突起が付く場合は5単位、6単位など単位数が少ないのが特徴である。波頂内面にやや小振りな突起を付ける場合もある（第6図3、第7図1・2）。肩部で屈曲する有文深鉢の文様帯は、I・IIa・IIの3帯構成が普及し、以降の文様帯構成の基底となる。上述の通り、屈曲位置は器高の中央近くにあり、IIa・II文様帯が幅広なので、その文様も大柄である（第7図1・3）。磨消文様で装飾を施すものは、ネガ・ポジ文様手法で整然としており、十腰内4式古段階と共通する襷掛け状文、帯状文が用いられる（第7図1）。在地的な孤線、鋸歯状、稲妻状などの沈線文も多用されるとともに（第7図2）、襷掛け状文、あるいはその変容した文様が沈線文で描かれる場合がしばしばみられる（第7図3）。

鉢と浅鉢も深鉢と同様に、波状口縁、あるいは突起が付く場合は5単位、6単位など単位数が少ないのが特徴である（第7図7・8）。文様には在地的な孤線、鋸歯状などの沈線文が多用される。

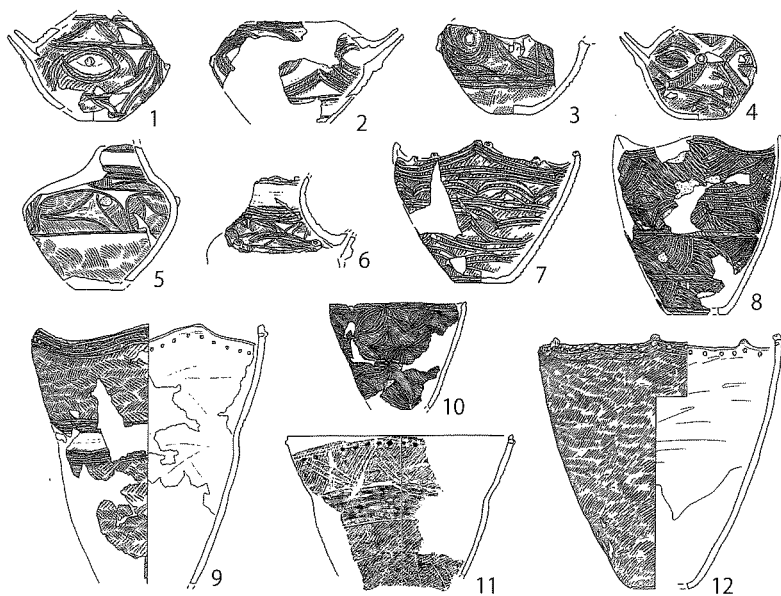
## (2) 堂林2式

堂林1式に後続する段階は、柏木川4遺跡縄文時代後期の「氾濫原」出土品とみられ（北海道埋蔵文化財センター2010）、第8図は同出土品から抜粋して掲載したものである。本資料は、遺跡単位で堂林1式の土器製作から刻目手法が衰退していく段階のまとまりが看取される資料で、その特徴は以下の点にある。①波状口縁深鉢の波頂単位や口縁に付す突起は5単位が多いとみられ（第8図3・6、北海道埋蔵文化財センター2010：図Ⅲ-61-土器集中15、図Ⅲ-69-土器集中26）、堂林1式の特徴を継承している。②堂林1式に比べ、I文様帯がやや幅広になるのに伴い沈線間隔の幅広化や沈線本数も3・4本のもが増える傾向がみられる（第8図1～3）。③肩部が屈曲する深鉢では、屈曲する位置は器高の中央近くにあり、IIa文様帯が幅広なので、文様も大柄である（第8図1・2）。また、頸部に幅狭な無文帯が配置され、その下に刻目列が置換された平行沈線が施されたものがみられる（第8図1・3・5）。④文様施文において沈線文が卓越するようになる。深鉢には、沈線文による襷掛け状文（第8図2）、襷掛け状文が変形して弧線文化した文様（第8図6）、稲妻文が変容してジグザク化した文様（第8図4）などが施され、堂林1式の痕跡がうかがえる。第8図2には、襷掛け状文間のスペースに補助的な弧線文を加える点に新たな文様構成の胚胎が看取される。⑤深鉢は第8図1・4・6のように文様帯が横位の沈線により区切られ、重畳化がみられるのも本遺跡出土品の特徴である。堂林1式には既にIIa・II文様帯を横位の沈線で区切る手法が用いられているので（第7図2）、継承されたものとみられる。⑥注口土器（第8図8・9）の器形は、胴部が球状で、口縁が短めで弱く外反するか、垂直に近く立ちあがる2段造りである。深鉢と同様に胴部には横位の平行沈線

周堤墓形成期の土器研究



第8図 柏木川4遺跡出土品 (S=1~3・5・7:1/12, 4・6・8・9:1/8)



第9図 キウス4遺跡S盛土S-3層出土品 (S=1~7:1/8, 8~12:1/12)

が施される。第8図8の口端，胴部には刻目が施されているが，刻目の間隔が空き粗雑化する傾向が看取される。なお，壺，あるいは注口土器の土器集中27（北海道埋蔵文化財センター2010：図Ⅲ-69-土器集中27）には，やや細身であるが整然とした磨消文様による襷掛け状文が施されており，第8図8・9よりも先行する資料の可能性はある。

第8図8・9の注口土器は装飾性に乏しいが，キウス4遺跡出土品からすると当該期には装

飾的な文壺・注口土器が組成化するとみられる。集落遺跡であるとともに墓地遺跡でもあるキウス4遺跡と、「氾濫原」から炉跡が検出されキャンプ・サイトの様相を呈する柏木川4遺跡の機能の差異が土器組成にあらわれているのであろう。

柏木川4遺跡「氾濫原」出土品は、深鉢、注口土器ともに刻目手法が衰退する傾向が看取されるが、器形、文様に堂林1式の痕跡を残し、堂林式の1階梯をなすものとみられる。文様では、特に、沈線文様が卓越していく傾向が看取され、北海道中央部における土器制作の独自性が顕著になる時期である。

柏木川4遺跡「氾濫原」出土品に近接する時期の資料としては、キウス4遺跡北側盛土に位置するL地区S盛土S-3層出土品などがある(北海道埋蔵文化財センター1998b)。S-3層出土品<sup>(5)</sup>は、鯺澗式～堂林式の資料が混在しているが、鯺澗式や堂林1式を差し引けば、半完形品を中心に当該期の様相がある程度うかがえる資料である。その半完形品を中心とした資料を第9図に抜粋した。

深鉢(第9図9・11・12)は、柏木川4遺跡「氾濫原」出土品と上述した①～④の点について共通した特徴を有する。壺・注口土器の器形は、胴部が球状に近いものもあるが(第9図4)、胴部中央に稜を形成し、新しい特徴を呈するものがみられる(第9図1・2・6)。磨消文様と沈線文様(第9図1～3・6)は並存したとみられるが、後者が卓越する傾向がうかがえる。襷掛け状文などが沈線化、孤線化するとともに単位文様が小形化する傾向が顕著で、注口は細めで華奢になる(第9図1・2・4)。これら孤線化した沈線文様は、後述する堂林3式へ過渡的であり次段階の文様装飾の基底となる。S-3層からは、十腰内4式新段階(小林2015)に類似の磨消文様による入組帯状文を施す異形の壺(第9図5)が出土しており、鯺澗式や堂林1式を差し引いたS-3層出土品の主体となる資料が近接する時期であることを示唆している。

なお、第6・7図に示した堂林1式と柏木川4遺跡「氾濫原」出土品にはヒアタスがあり、過渡的な段階が想定される。堂林1式から堂林2式への変化の方向性としては、襷掛け状文の弧線文化、磨消文様の細身化や沈線文化、及び単位文様の小形化が予察される。また、キウス4遺跡S-3層出土品には、第9図1～3・6の壺・注口土器に示唆されるように、柏木川4遺跡「氾濫原」出土品よりも新相を呈する資料が含まれている可能性がある。堂林1・2式の細分、及び各細分段階の内容や判別方法について、良好な一括資料や層位的資料により明らかにすることが今後の課題である。

### (3) 堂林3式

キウス4遺跡F・G地区やR地区の盛土上位層準から当該期の資料が出土しているが(北海道埋蔵文化財センター2001・2003a)、F・G地区では盛土出土品と遺物包含層出土品が一括して報告されていることと、R地区盛土上位層準出土品には瘤付土器第Ⅲ段階並行期の資料がかなり混在しているとみられるため、本稿では浜中2遺跡R地点のV層出土品を検討する(第10図)。浜中2遺跡は北海道北部に位置するが、北海道中央部と該期における土器の変化の方向

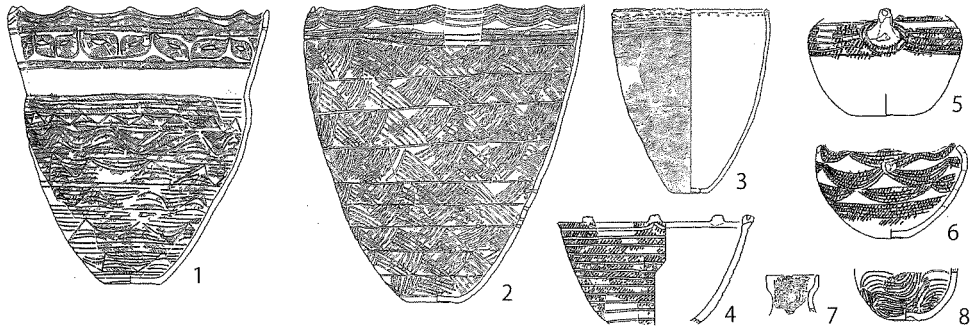
性は大きく変わらないとみられる。同遺跡は、縄文時代後期～アイヌ文化期の複合的な砂丘遺跡で、R地点では、Ⅱ層～Ⅴ層を層位的に確認するとともに、それに伴い多量の動物遺体、石器、土器が検出された(国立歴史民俗博物館 2000)。Ⅱ層はオホーツク文化期、Ⅲ層は続縄文時代前半期、Ⅳ上層は縄文時代晩期後葉、Ⅴ層は縄文時代後期後葉である。Ⅴ層出土品には、堂林3式に先行する資料(国立歴史民俗博物館 2000: 図4-23-105)や、後述する瘤付土器第Ⅲ段階並行期とみられる資料(国立歴史民俗博物館 2000: 図4-27-112, 図4-37-165・167・171)が含まれているが、堂林3式主体とみられる。同層出土品の特徴を器種ごとに下記にまとめる。

肩部で屈曲する深鉢は、屈曲部が弱くなるとともに、波状口縁の単位数が10以上のものが増加し、小波状口縁が特徴となる(第10図1)。屈曲する位置は器高の上位にあることと、Ⅰ文様帯、及び頸部無文帯の幅広化に伴いⅡa文様帯の幅狭化が顕著になる(第10図1)。それに伴い文様も小形化、圧縮化されるようになる。また、Ⅰ文様帯における平行沈線の本数が4本以上に増加する。有文の砲弾形深鉢でも口縁沿いに平行沈線を施すものは4・5本が多い(第10図3)。磨消文様は衰退し、沈線文様が盛行する。沈線を多用する手法は弧線文を連結させる構図と結びつき、雑描きの新たな文様も生成する。こうした構図は、後述する次段階の瘤付土器第Ⅲ段階並行期へ過渡的である。

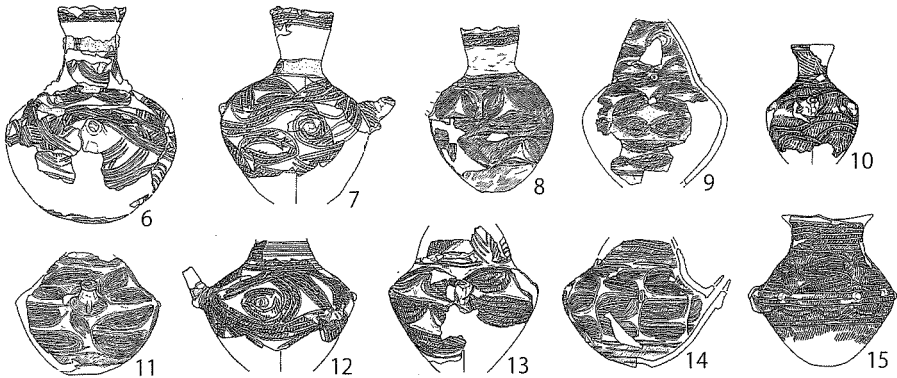
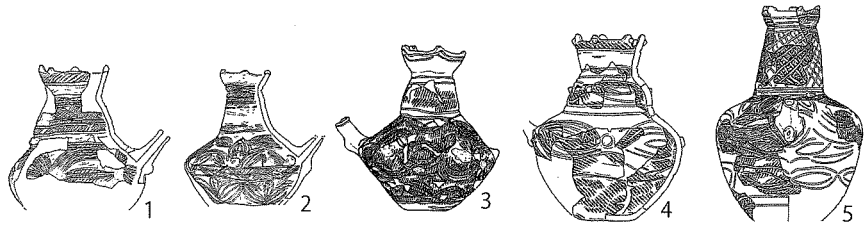
壺・注口土器の全形がわかるものはないが、口縁が短めで外反するものが出土している(第10図7)、口縁、頸部、胴部から構成される3段造りの器形になるとみられる。深鉢と同様に、壺・注口土器にも沈線文による弧線文や雑描きの文様が盛行する(第10図5・6・8)。

浜中2遺跡R地点Ⅴ層出土品には壺・注口土器の完形品が欠如するので、キウス4遺跡出土品から該期の資料を補完し、検討する。第11図1～5は、該期とみられるキウス4遺跡出土品の完形品に近い壺・注口土器を抽出したものである。これらの特徴は、頸部が長めで内傾し、口縁が短めで外反する3段造りの器形にある。算盤玉状の胴部が盛行するのも該期の特徴とみられる(第11図2・3)。胴部が球状のものも一部残るとみられるが、胴部の径が縮小することと口頸部が長く細めになるため、器形全体が細身になる。注口は細めで、基部に弱い張り出しが付くものが多い(第11図1～3)。文様は、浜中2遺跡R地点Ⅴ層出土品と同様に胴部に沈線文によるやや雑な孤線文が盛行し、頸部にも平行沈線文や孤線文などが施文される場合がある。

なお、キウス4遺跡からは、器形(細長の口頸部)、文様(孤線連結文)の特徴から、これら資料の直前段階に位置づけられるような壺・注口土器が出土している(第11図6～15)。第11図6～9・11・13～15に施された構図は、S盛土S-3層出土品に比べると、単位文様の小形化が顕著であるが、木葉状沈線文を縦・横位に組み合わせ整然としている点に特徴がある。やや大柄の沈線化した襷掛け状文の上下に補助的な連弧文が加えられた第11図6は、この中でも古手、あるいは先行する資料の可能性はある。これらの資料は、キウス4遺跡S盛土S-3層出土品と時期的に重複するものが含まれる可能性があるが、同出土品に後続し、堂林2式から堂林3式への過渡的様相を呈している。



第10図 浜中2遺跡R地点V層出土品 (S=1・2:1/12, 3:1/16)



第11図 キウス4遺跡出土の注口土器 (S=1/8)

(4) 堂林式編年に関する先行研究との対比

本稿の堂林式編年と先行研究(土肥 2001, 阿部 2008)によるものでは標本図に関する認識などについて異同があるが、堂林1式は土肥(2001)のⅡ期に対比される。また、堂林1式に関するものとして、忍路土場遺跡編年案に依拠した鮭澗式新(末)段階/エリモB式と堂林式古段階がある(阿部 2008)。鮭澗式新(末)段階/エリモB式と堂林式古段階は、深鉢、壺・注口土器の口端、頸部における刻目列の有無を基準として、刻目列を施すものを鮭澗式新(末)段階/エリモB式、施さないものを堂林式古段階に該当させている。この基準では、キウス4遺跡F・G地区建物19出土の一括資料(第6図)の説明が困難となる。また、鮭澗式新(末)段階/エリ

モ B 式は、十腰内式編年(小林 2015)と対比すると十腰内 3 式(阿部 2008: 図 1-1・2)と十腰内 4 式古段階(阿部 2008: 図 1-9・15)に対比される資料を含み、2 時期に分離される。堂林 2 式は土肥(2001)のⅢ期、阿部(2008)の堂林式古段階に対比される。堂林 3 式は、土肥(2001)のⅣ期、阿部(2008)の堂林式中段階に対比される。

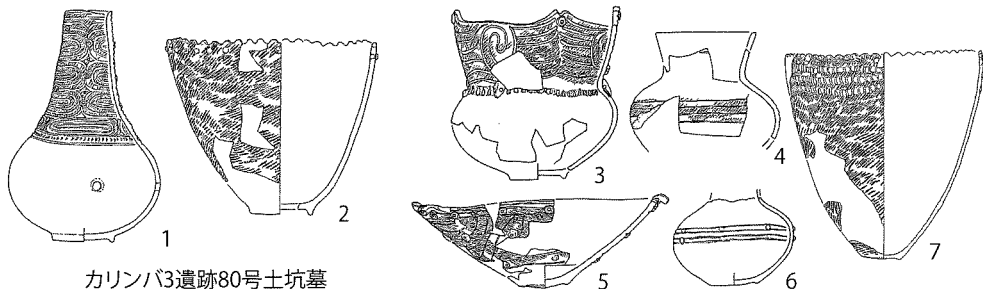
#### 4. 瘤付土器第Ⅲ段階並行期

##### (1) 当該期の一括資料とその特徴

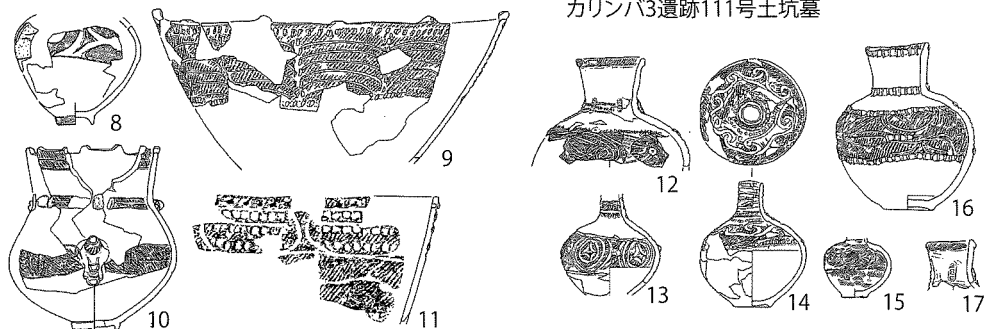
当該期は、貼瘤、刻目列手法の盛行など、瘤付土器第Ⅲ段階に広くみられる特徴が顕著になり、在来の堂林式に特徴的な器形、文様帯構成、平行沈線による文様の描出などは、特定器種(肩部で屈曲する深鉢など)に限られる傾向がみられるようになる。該期の一括資料は、柏木 B 遺跡 447 号土坑墓出土品、カリンバ 3 遺跡 30・80・111 号土坑墓出土品、美々 4 遺跡 378 号土坑墓出土品、美々 4 遺跡 BS3 周堤墓 16 号土坑墓出土品、美沢 1 遺跡 JX3 周堤墓 106 号土坑墓出土品などが好例である(第 12 図)。

これらの資料では、器種を越えて弧線文、貼瘤、刻目が文様装飾手法として多用される。弧線文は、連弧状に配置する場合(第 12 図 3・5・9)や上下に相対させて連弧状楕円文になる場合がある(第 12 図 18)。楕円文は、第 12 図 34 のように横位に充填、あるいは重畳化させるものもある(第 12 図 1)。第 12 図 31 の口端には背向いの弧線文が横位に充填され、頸部には縦長の突起両側に「( )」状文様を配するとともに、背向いの弧線文が充填されている。この構図の変異は、瘤付土器第Ⅲ段階に東日本、北日本で広く看取される。第 12 図 21 の壺胴部文様帯には、「( )」状文様を起点にやや雑描き状の孤線文が充填されている。2 単位の木葉状孤線文を相対させることで七宝繫状文や円文が生成する(第 12 図 13・28・38)。円文は同心円状になる場合がある(第 12 図 13・15)。磨消文様の 2 単位の孤線文をジグザクに充填したのが第 12 図 39 の構図である(ただし、変則的に構図を変えている)。第 12 図 23 の壺口縁部文様帯には、磨消文様の孤線文が上下に配置されている。孤線文は変形して、蕨手状(第 12 図 3・12)、渦状(第 12 図 15)、鉤状(第 12 図 14)を呈するものもある。渦状文と同心円文が併用される場合があり(第 12 図 15)、これらの文様が当該期の変異であることを示す。孤線文の変形が進み、雑描き状を呈する場合もある(第 12 図 21・30)。

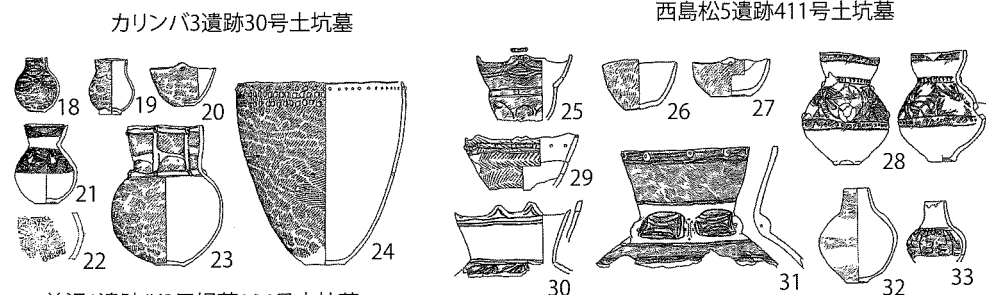
貼瘤は器種を越えて盛行し、その形状も様々である。小粒のもの(第 12 図 6)、中央に刺突を施すもの(第 12 図 1・3・5・12・31)、縦位、あるいは横位の短沈線を加えるもの(第 12 図 28・34)などがある。貼瘤の周りにヘラ状工具で刻目を加えた花卉状を呈するものもある(第 12 図 36・38)。花卉状の瘤や第 12 図 38 にみられる小円文周囲に刻目を加えた花卉状文様は近似する手法で、北日本の広域で看取され、広域編年の指標になる。貼瘤は口端沿い(第 12 図 5・31・34)や文様の起点になる部分(第 12 図 1・3・5・12・28・34・39)に施され、文様装飾の一部となる場合もある。横走る沈線と組み合わせ、文様帯の区画として用いられる場合もある(第 12 図



カリンバ3遺跡80号土坑墓



カリンバ3遺跡111号土坑墓

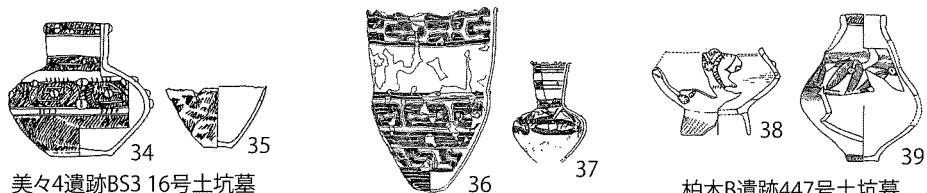


カリンバ3遺跡30号土坑墓

西島松5遺跡411号土坑墓

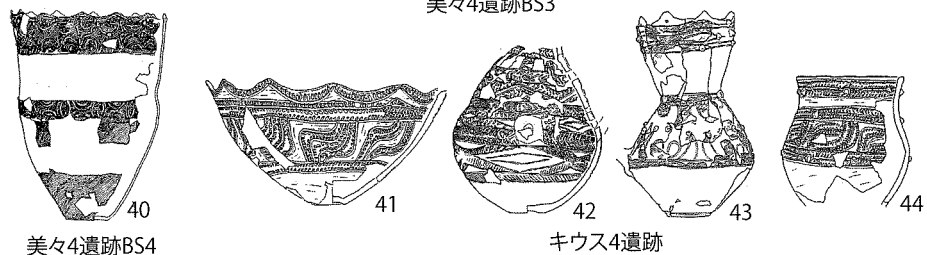
美沢1遺跡JX3周堤墓106号土坑墓

美々4遺跡378号土坑墓



美々4遺跡BS3 16号土坑墓

柏木B遺跡447号土坑墓



美々4遺跡BS4

キウス4遺跡

第12図 瘧付土器第Ⅲ段階並行期の一括資料と関連資料

(S=1~6・8~17・22・25~35・37~42・44:1/8, 7・36・43:1/12, 18~21・23・24:1/15)



23・44)。

刻目は文様帯の区画(第12図14~16・28・34・41・44)として、あるいは器形の変化する部分に施される(第12図12・16)。刻目を縦位に配置したり、あるいは刻目の原体を押し引くことで凹線を施し、装飾の一部とする場合もある(第12図14)。沈線間に刻目を充填する手法は北日本の広域で看取され、広域編年の指標になる(第12図38・41・42・44)。刻目の形状は、指や竹管状工具によるとみられる粗いマクレ状のもの(第12図3・7・16・24)、竹管状工具による「D」字状(第12図1・9・12~15・19・28・33・34)、ヘラ状工具による「ハ」の字状(第12図41・42・44)などがある。粗いマクレ状の刻目は、第12図7・24のように粗製深鉢にしばしば施される。刻目に関する手法は、後述する通り、遺跡により差異がみられる。

土坑墓一括資料以外では、キウス1遺跡平地住居跡出土品(大場・石川1967)が該期の好資料である。この平地住居跡には、瘤付土器第Ⅲ段階並行期に先行する土器が若干、混在しているが、遺物包含層出土品に比べ瘤付土器第Ⅲ段階並行期資料にまとまりがみられる(坂口2014)。その土器組成は、遺物包含層出土品と比べ、注口土器、壺など精製土器が出土しているのが特徴である(大場・石川1967:113)。また、遺跡の機能により、土器組成が異なる点に注意が必要である。キウス1遺跡平地住居跡からは、あらゆる器種がまんべんなく出土しているのに対し、土坑墓出土品は、注口土器、壺に偏る傾向がみられ、その中でも小形品が選択される傾向がある。以下、瘤付土器第Ⅲ段階並行期資料の特徴を器種ごとに概略する。

壺は、細口壺と広口壺に分化する傾向がみられる。また、眼鏡状隆帯が現れる(第12図10)。土坑墓から出土する壺・注口土器には、小形のものしばしばみられ、こうした小形品は、埋葬儀礼に選択して用いられたとみられる(第12図18・19・21・28・32など)。貼瘤、刻目列手法の盛行、及び文様では後期三叉文(小林2010:73-76)が現れ、瘤付土器第Ⅲ段階に広くみられる特徴が顕著になる(小林2010:39)。

小形の鉢は、縄文地文の素文土器で(第12図20・26・27・35)、波状口縁(第12図20・27)や、口唇に刻目を施すものがある(第12図35)。

在来の肩部で屈曲する深鉢は、該期に継承され、次節で後述する。砲弾形深鉢の口唇には刻目が施され、突瘤と併用されることもある(第12図7・24)。また、上述の通り、器面を掘り起こしたマクレ状刻目が盛行する(第12図7・11・24)。

このように該期は、貼瘤、刻目列手法の盛行など、瘤付土器第Ⅲ段階に広くみられる特徴が顕著になるが、東北地方の瘤付土器との相違も看取される。当該期における東北地方の壺・注口土器は、黒色研磨された精製土器で、無文のものも多く、焼成も深鉢とは異なる。一方、北海道中央部では注口土器・壺にも深鉢と同様な焼成、及び刻目が用いられ、無文のものは少ない。東北地方の瘤付土器では、器種と手法の相関性が高く、刻目列は一般的に深鉢に施される傾向がみられる。それに対し、北海道中央部では、東北地方で看取される器種と手法の相関性はみられない。

瘤付土器第Ⅲ段階並行期は、土肥(2001)のV期に対比される。また、当該期に関連するものとして阿部(2008)の堂林式新段階、三ツ谷式古・新段階、及び御殿山式古・新段階があり、これらの評価については、7章で後述する。

## (2) 瘤付土器第Ⅲ段階並行期の堂林式深鉢

当該期には、瘤付土器第Ⅲ段階に広くみられる特徴が顕著になるが、在来の土器制作は肩部で屈曲する深鉢に継承される。瘤付土器第Ⅲ段階並行期の堂林式深鉢は、①瘤付土器第Ⅲ段階並行期資料との共伴関係、②瘤付土器第Ⅲ段階の手法(刻目列、貼瘤、花卉状瘤)や文様(後期三叉文(小林 2010: 73-76)など)を在来の土器制作に取り入れた資料から比定できる。

①の瘤付土器第Ⅲ段階並行期資料と共伴する事例には、美々4遺跡 378号土坑墓出土品(第12図 29)がある。②の事例には、美々4遺跡「環状溝墓」BS3・4出土品(第12図 36・40)などがある。第12図 36には、瘤付土器第Ⅲ段階に盛行する花卉状の瘤が口縁波頂部と胴部に付されている。BS3には、他時期の資料が混在しているが、瘤付土器第Ⅲ段階並行期の資料については器種を越えて貼瘤される傾向があり、時的なまとまりが看取される(北海道教育委員会 1981)。BS3「環状溝墓」16号土坑墓からは、第12図 34が出土していることも時的に整合性がある。

第12図 40は、第12図 36とともに堂林式深鉢の好例である。その器形は第12図 36と共通する特徴を有し、Ⅱa文様帯には背反する孤線文、Ⅱ文様帯には「( )」状孤線文と横位に背反する孤線文が交互に充填され、文様の起点となる箇所貼瘤されている。「環状溝墓」BS4出土品もBS3出土品と同様に、貼瘤されたものが多く出土しており(北海道教育委員会 1981: 図 82-2, 図 83-9・22)、瘤付土器第Ⅲ段階並行期のまとまりが看取される。

キウス4遺跡R地区盛土上位に相当する盛土D-4層 r-82・83グリッド、盛土E-1・2層 s-83・84グリッド、盛土Y-1層 x-74グリッド、y-73・74グリッド出土品も瘤付土器第Ⅲ段階並行期資料のまとまりが看取され、当該期の堂林式深鉢の好例が含まれる(北海道埋蔵文化財センター 2003a: 図Ⅳ-41, 図Ⅳ-64下段, 図Ⅳ-107)。

瘤付土器第Ⅲ段階並行期の肩部が屈曲する堂林式深鉢の特徴は、下記の点にあり、在来の土器製作が変容していく過程を示す。①肩部の屈曲が弱まり、砲弾形に近い器形に近づき、頸部無文帯が幅広になる傾向がみられる。②文様の構図は、単位となる文様の連繋がみられなくなる。③在来の文様に刻目列が充填されるものもある(北海道埋蔵文化財センター 2003a: 図Ⅴ-69-456など)。④Ⅰ文様帯下に無文帯が配置されたり、Ⅱa文様帯が多帯化しているものもみられる(北海道埋蔵文化財センター 1998a: 図Ⅳ-49-8)。⑤堂林3式よりも口縁波頂の単位数が増加するものがみられ(北海道埋蔵文化財センター 2003a: 図Ⅴ-2-10など)、鋸歯状に近い口縁も現れる。

堂林3式から瘤付土器第Ⅲ段階並行期への深鉢の変化は漸移的であり、同定には困難が伴う。上記した①～⑤の特徴を有する資料を鑑定する際には、瘤付土器第Ⅲ段階並行期ではないかと

注意して精査，同定する必要がある。

### (3) 遺跡による文様・構図に関する変異

当該期には，遺跡により文様・構図に関する変異も看取される。入組带状文，及び階段状入組文は，柏原5遺跡<sup>かしわばら</sup>，美々4遺跡出土品で看取される傾向がある（苫小牧市教育委員会1997；北海道埋蔵文化財センター1984・1998a）。マクレ状刻目を深鉢の波状口縁沿いや沈線文沿いに充填したり，縦位，波状に配置し装飾的に用いる手法は，美々4遺跡ⅡB2層出土品，柏原5遺跡2B層出土品，カリンバ3遺跡出土品で看取される（北海道埋蔵文化財センター1998a，苫小牧市教育委員会1997，恵庭市教育委員会2003）。縦位弧線文を右，あるいは左に90°回転させることで意匠化したとみられるヒップ状文様（第12図33，北海道埋蔵文化財センター1998a：図Ⅳ-38-89・91）は，美々4遺跡，柏原5遺跡2B層出土品（苫小牧市教育委員会1997：図5-37-78）で看取される。

上述の通り，刻目の手法についても遺跡により変異が看取される。キウス4遺跡では，壺・注口土器，浅鉢，深鉢に「ハ」の字刻目が多用されるが（第12図41・42・44），マクレ状刻目が施された深鉢は少数例が確認されるのみである（北海道埋蔵文化財センター2001）。キウス1遺跡平地住居跡出土品では，深鉢へのマクレ状刻目，壺などへの「ハ」の字刻目の両手法が看取される（大場・石川1967）。キウス4遺跡以外で「ハ」の字刻目が施された壺・注口土器，浅鉢などが一定量出土しているのは美々4遺跡であり，同遺跡ではマクレ状刻目が施された深鉢も多数出土している（北海道教育委員会1979a・1981；北海道埋蔵文化財センター1984・1998a）。一方，柏木B遺跡では，マクレ状刻目が施された深鉢は多数出土しているのに対し，「ハ」の字刻目が施された広口壺は少数確認できるのみである（恵庭市教育委員会1981）。カリンバ3遺跡でも，マクレ状刻目が施された深鉢は多数出土しているのに対し，「ハ」の字刻目が施された注口土器は少数である（恵庭市教育委員会2003・2004）。柏原5遺跡2B層でもマクレ状刻目が施された深鉢は多数出土しているのに対し，「ハ」の字刻目は細口壺1点に確認できるのみである（苫小牧市教育委員会1997）。こうした土器制作に関する文様，手法の変異は，それぞれの地域集団にかかわる土器制作者／集団の存在や，地域集団間の需要・供給による土器の多様な搬出・搬入関係を示唆する。

## 5. 瘠付土器第Ⅳ段階並行期

### (1) 当該期の一括資料とその特徴

#### 北海道中央部

該期の一括資料は，西島松5遺跡<sup>にしじまつ</sup>395・398・399・431・497・506・526・510号土坑墓出土品，カリンバ3遺跡118号土坑墓出土品，美々4遺跡X310・X311号土坑墓出土品，美沢1遺跡38号土坑墓出土品，御殿山遺跡<sup>ごてんやま</sup>3号配石墓出土品など充実している（第13a・b図）。これら資料の特徴は，器種を越えて瘠付土器第Ⅳ段階に広く用いられる孤線文，七宝繫状文，三叉状陰

刻・沈刻、及びこれらを組み合わせた文様が多用されることにある。単位となる孤線文を組み合わせてたり、変形させたり、あるいは三叉状陰刻・沈刻を付加することで、多様な構図が生成する。2単位の孤線文と三叉状陰刻を組み合わせた構図は北日本～東日本の当該期の注口基部にしばしば施される（小林 2010：図 29）。第 13a 図 9 のファロス付注口<sup>(6)</sup>基部には、そのやや粗雑な構図が看取される。三叉状陰刻で囲まれたスペースに縦位列点文を施し、周りに七宝繫状の磨り消された弧線文を展開させているのが第 13a 図 34 の構図で、さらに七宝繫状文間に上下に対置する三叉状陰刻を施すことで装飾効果をあげている。注口（欠損している）周囲の円文に三叉状沈刻を巡らせるとともに、円状弧線文両側に三叉状沈刻を付加した構図が胴部に施されたのが第 13a 図 32 である。こうした文様描出は、後述する第 13b 図 9 と類似する手法である。注口周囲に三叉状陰刻・沈刻を巡らせ、その周りに三叉状陰刻を付加した磨消文様による孤線文で動物造形（ヘビ）を描出しているのが第 13b 図 2 の注口土器である。

横位の孤線文を 2 段に配置し、その隙間に円文と向かい合わせの三叉状陰刻を対置させたのが第 13a 図 20 の構図である<sup>(7)</sup>。この構図は、上下の孤線文末端が連結すれば、七宝繫状文が展開するので、第 13a 図 20 は高石野類型注口土器（小林 2010：図 29）に類するものとみなすこともできる。横位 2 単位孤線文、あるいは連弧状孤線文を背反させて、その隙間に向かい合わせの三叉状陰刻を横「I」状に配したのが、第 13a 図 18 の構図である。ただし、文様連結部に縦位の孤線文、あるいは 2 単位孤線文が配されており、孤線文が雑描きであるとともに構図も極めて変則的である。

三叉状陰刻を付加したポジ文様のハート形孤線文を上向き、下向きに交互に配置し、その文様間に上下に対置する三叉状陰刻を加えたのが第 13a 図 7 の構図である。類似する構図と手法は、第 13a 図 22、第 13b 図 1 に看取される。楕円状弧線文に背向かいの三叉状陰刻を付加するとともに、その文様間に上下に三叉状陰刻を対置させたのが、第 13a 図 22 頸部文様帯の構図である。この注口土器口縁部には、三叉状陰刻が上向き、下向き交互に配置されている。底部には向かい合わせの三叉状陰刻を横「I」状に配し、三叉状陰刻で囲まれた楕円状スペースに縦位の刻目を施している。磨消文様の楕円文を 2 段に配し、その文様間に上下向かい合わせの三叉状陰刻を施したのが第 13b 図 1 の胴部文様帯構図である。

ネガ文様の弧線文を階段状に入り組ませ、ポジ文様に三叉状沈刻を付加したのが第 13a 図 26 の胴部文様帯の構図である。胴部が球胴で底部がすぼまる器形が特徴的なファロス付注口土器である。東北地方の入組带状文では、ネガ文様に三叉状沈刻が施されるので、ネガ・ポジ文様の関係が逆転していることになる<sup>(8)</sup>。これと類似する構図が施されているのが美々 4 遺跡墳墓 M5 出土の壺である（北海道教育委員会 1977b：図 103-5）。ポジ文様に三叉状陰刻／沈刻を付加する手法は、第 13a 図 7、第 13b 図 2 にも看取され、北海道中央部の土器制作者の手法とみられる。

孤線文は、第 13a 図 15 のミニチュア土器のように縦位に配される場合もある。第 13a 図 10

の鉢に施されたやや粗雑な綾杉状文は、縦位孤線文の変異とみることもできる。沈線間に刻目を充填した弧線文を縦位に鉤状、あるいは蕨手状に入り組ませ並列配置させるとともに、その文様間のスペースを斜線で区切り、斜線を軸として三叉状陰刻を対置させるように配置したのが第13a図17の基本構図である。ただし、下記の点に変則性が看取される。①弧線文間のスペースに斜線を挿入する場合と挿入しない場合がある。②弧線文の入り組む部分に点文を施す場合と施さない場合がある。③背面（注口の反対側）は、弧線文を縦位に入り組ませないで、蕨手状文様を充填している。

孤線文は、第13a図20のように規則的に配置される場合もあるが、孤線文、三叉状陰刻を複雑、変則的に絡み合わせた構図は北海道中央部や東部独自で、第13a図12の場合、そうした文様が注口土器の正面（注口周囲）にのみ施されている。

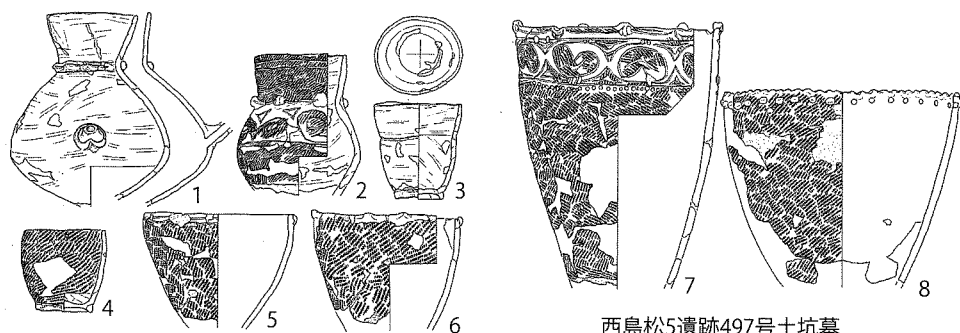
構図の変則性は、文様装飾に関する自由度を高め雑描きの近い孤線文（第13a図2・18）を生成する要因となる。構図の変則性のため、三叉状陰刻がランダムに近く配置される場合もある（第13a図2）。

当該期の東北地方で盛行する入組帯状文は、後述する通り、北海道中央部では少数である。第13a図36の台付き鉢の口縁には、左下がり入組帯状文の入り組む箇所三叉状沈刻を対置する構図が展開するものとみられる。

#### 北海道東部

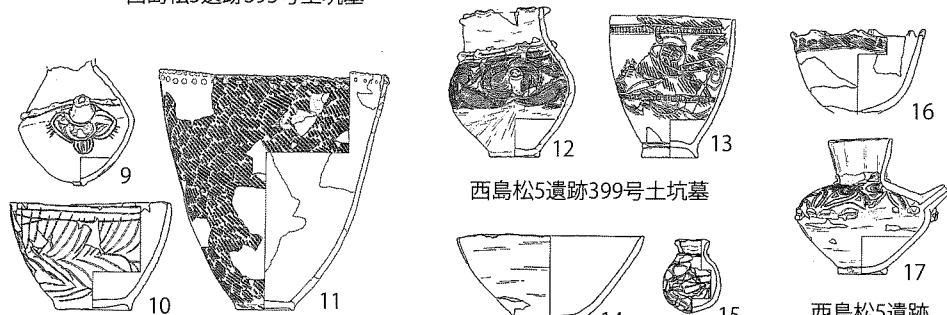
北海道東部では、朱円周堤墓<sup>しゅえん</sup>A号1号墓出土品（第13b図5～10、口絵3・4）が当該期の一括資料である（河野1981、北海道埋蔵文化財センター2012）。これら資料の特徴も北海道中央部と同様に、器種を越えて瘤付土器第IV段階に広く用いられる孤線文、七宝繫状文、三叉状陰刻、及びこれらを組み合わせた構図が用いられることにある。後述する通り、朱円A号1号墓出土品は、縄文時代後期末として示された学史的にも重要な資料を含むため（野口・安孫子1981）、個別に記述する。

第13b図5は、広口壺で、ツメ状列点文で区画された胴部文様帯に楕円と円を組み合わせた文様（単位文様）を上下2段に配置し、その文様間に沈線、及び背反する三叉状陰刻を付加する。第13a図7と類似する手法である。下段の単位文様間下部には、上向きの三叉状沈刻を加える箇所と加えない箇所があり、変則的である。第13b図6は、4単位の方形波状口縁深鉢で、列点文で区画された文様帯に入組帯状文が施されている。入組帯状文が下がる所では、円状の透かし、あるいはつまみ出すような押圧が施されている。第13b図7は胴部に帯縄文を巡らせ、その下部に円状の沈線文が施された壺である（注口が欠損したファロス付注口土器の可能性も残る）。第13b図8は、胴部文様帯に上向きと下向きの孤線文を交互に充填し、孤線文の背後に沿うように刻目を施すとともに、孤線文間に向きが一定しないややランダムな三叉状陰刻を配置した壺である。第13b図9は、円文の内外に三叉状陰刻・沈刻を加えた構図で装飾された壺で、底部に眼鏡状隆帯が施されている。第13b図10は、頸部には孤線文を境に上向き、下



西島松5遺跡497号土坑墓

西島松5遺跡395号土坑墓

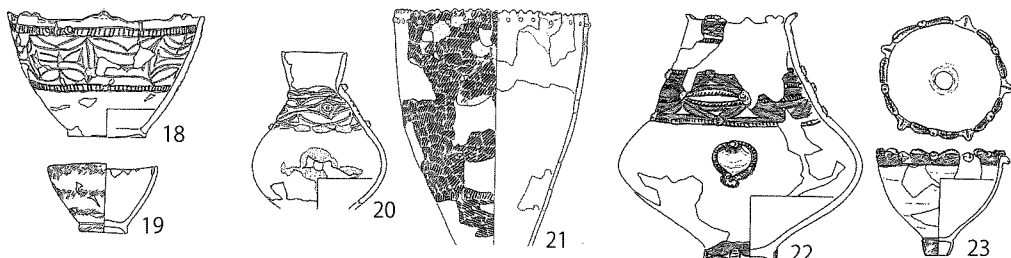


西島松5遺跡399号土坑墓

西島松5遺跡431号土坑墓

西島松5遺跡526号土坑墓

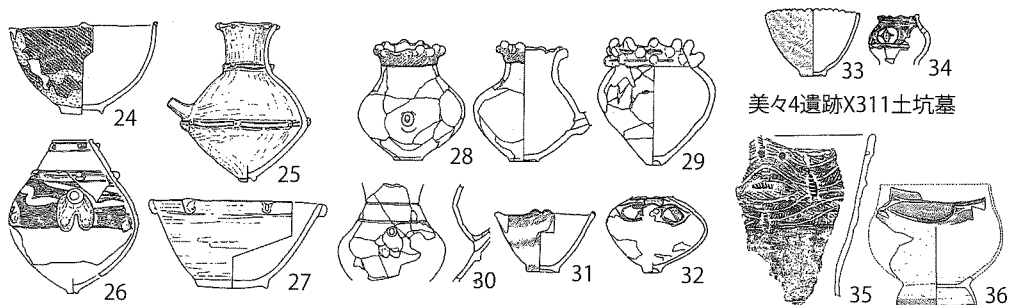
西島松5遺跡398号土坑墓



西島松5遺跡510号土坑墓

西島松5遺跡506号土坑墓

カリンバ3遺跡126号土坑墓



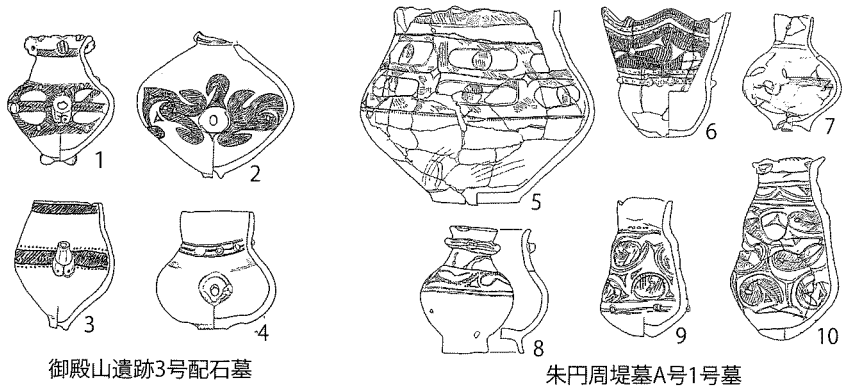
カリンバ遺跡118号土坑墓

美々4遺跡X310土坑墓

美々4遺跡X311土坑墓

美沢1遺跡38号土坑墓

第13a図 瘤付土器第IV段階並行期の一括資料(1)  
(S=1~6・9・10・12~20・22~36:1/8, 7・8・11・21:1/12)



第13b 図 瘤付土器第IV段階並行期の一括資料 (2) (S=1~10 : 1/8)

向きの三叉状陰刻を交互に充填し(そうでない箇所もあり変則的である), 胴部から底部にかけては磨消文様の孤線文, 七宝繁状文を施し, 文様間のスペースに三叉状陰刻・沈刻を充填することで複雑な構図が描出された壺である。器形, 装飾, 手法, 焼成の近似性から, 第13b 図9と同一製作者によるものと推定される。

朱円周堤墓A号1号墓出土品は, 有文土器が豊富なため当該期の特徴を把握するための絶好資料である。特に, 第13b 図6は, 滋賀県滋賀里遺跡出土品とともに瘤付土器第IV段階並行期の資料として示され, 北日本から西日本における縄文時代後期末の広域編年の鍵となる資料である(野口・安孫子1981)。これらの理由から, 朱円周堤墓A号1号墓出土品は, 北海道の縄文時代後期末を位置づけるうえでも基準となる。

## (2) 瘤付土器第IV段階並行期の組成と特徴

以上の一括資料をもとに器種ごとに当該期資料の特徴を下記にまとめる。壺・注口土器の器形は, 胴部に最大径があり, 口縁部が弱く外反, あるいは垂直に近く立ちあがる傾向があり(第13a 図1・12・17・20・25・28, 第13b 図1・4・7・8), 頸部, あるいは胴部に眼鏡状隆帯がしばしば施される(第13a 図1・2・9・12・20・25, 第13b 図2・4・8・9)。底部は, 径が小さくすばまり上底, ボタン状のものもあり, そのままでは据え置くことができないものも多い(第13a 図9・22・25・26・29・32, 第13b 図2・3・7・9・10)。こうした器形は, 東北地方北部のものと同通する特徴を有する。その一方で, 美沢1遺跡出土品(北海道教育委員会1977a : 図43-2)のように, 胴部が算盤玉状, 頸部が内傾し, 口縁部がやや長めのラッパ状で在地色の強い注口土器もみられる。文様は, 瘤付土器第IV段階に広く用いられる孤線文と三叉状陰刻・沈刻を組み合わせた在地色の強いものが用いられ, 構図は東北地方のものとは比べ, 変則的なものが多い。既述の通り, 北海道中央部ではポジ文様部分に三叉状陰刻・沈刻が施されるものがみられ, この手法は大洞B式並行期まで継承される(千歳市教育委員会1994 : 図47-1, 北海道教育委員会1977a : 図43-1など)。

鉢は、地文が縄文、あるいは帯縄文を口縁部に施すもの(第13a図16・19)、素文(地文縄文含む)土器(第13a図14・33)、波状口縁土器(第13a図31)、有文土器(第13a図10・18)、突起付(第13a図24・27)がある。

肩部で屈曲する在来の深鉢は激減し、砲弾形深鉢が主流となる。有文の砲弾形深鉢は、口縁部文様帯には孤線文、七宝繫状文、三叉状陰刻を組み合わせた構図が用いられる。突瘤された砲弾形(粗製)深鉢は、瘤付土器第Ⅲ段階並行期から継続する(第13a図8・11・21)。刻目は、深鉢だけでなく、鉢(第13a図13・18)、注口土器(第13a図22)、壺(第13b図5・8・9)にも文様帯の区画、装飾の一部として継続して用いられる。刻目は、細めで器面に対して浅いものが多い傾向が看取される(第13a図13・18・22・36、第13b図5)。ただし、本稿で検討対象としているのは土坑墓出土品に限られるので、墓坑以外の時期が特定できる資料の分析が必要である。刻目には刺突に近いものもあり(第13b図8・9)、刺突列(第13b図3)は刻目の変異とみることでもできる。貼瘤は少数例が確認されるのみで(第13a図22・35・36、第13b図6)、減少する。

### (3) 先行研究との編年対比と遺跡による文様・構図に関する変異

瘤付土器第Ⅳ段階並行期は、土肥(2001)のⅥ期と重複する部分がある。Ⅵ期には、瘤付土器第Ⅲ段階並行期に位置づけられる美沢1遺跡JX3周堤墓106号土坑墓出土品(第12図18・21・23)と瘤付土器第Ⅳ段階並行期に位置づけられる美々4遺跡X310号土坑墓出土品(第13a図28・29)が含まれるので2時期に分離される。また、当該期に関するものとして御殿山式があるが、それに関する見解は様々で、7章で後述する。

遺跡による文様・構図に関する変異は、瘤付土器第Ⅲ段階並行期に引き続き看取される。第13a図28・29、第13b図1にみられる壺・注口土器口縁部の立体的な装飾は、美々4遺跡(北海道教育委員会1977b:図103-4・5・14、図104-18、北海道埋蔵文化財センター1998a:図IV-57-88)、美沢1遺跡(北海道教育委員会1977a:図43-2)、美沢2遺跡(北海道教育委員会1978:図432-470)、柏原5遺跡(苫小牧市教育委員会1997:図5-44-159・167・168)、御殿山遺跡(藤本1963:図版15-1)、茂<sup>も</sup>辺<sup>へ</sup>地<sup>じ</sup>遺跡(国立歴史民俗博物館2001:図12-224・226など)の出土品にも看取され、北海道中央部では瘤付土器第Ⅳ段階並行期に盛行することがわかる。また、その分布が太平洋側の遺跡に偏る傾向が注目される。

該期の東北地方で盛行する入組带状文は、柏原5遺跡(苫小牧市教育委員会1997:図5-60-416・417)、御殿山遺跡(藤本1963:図版17上段1・2・9・10)、美々4遺跡(北海道教育委員会1977b:図103-2)、カリンバ3遺跡(恵庭市教育委員会2003:図192-27)の出土品に少量ながら看取され、太平洋側の遺跡に分布が偏る傾向が注意される。

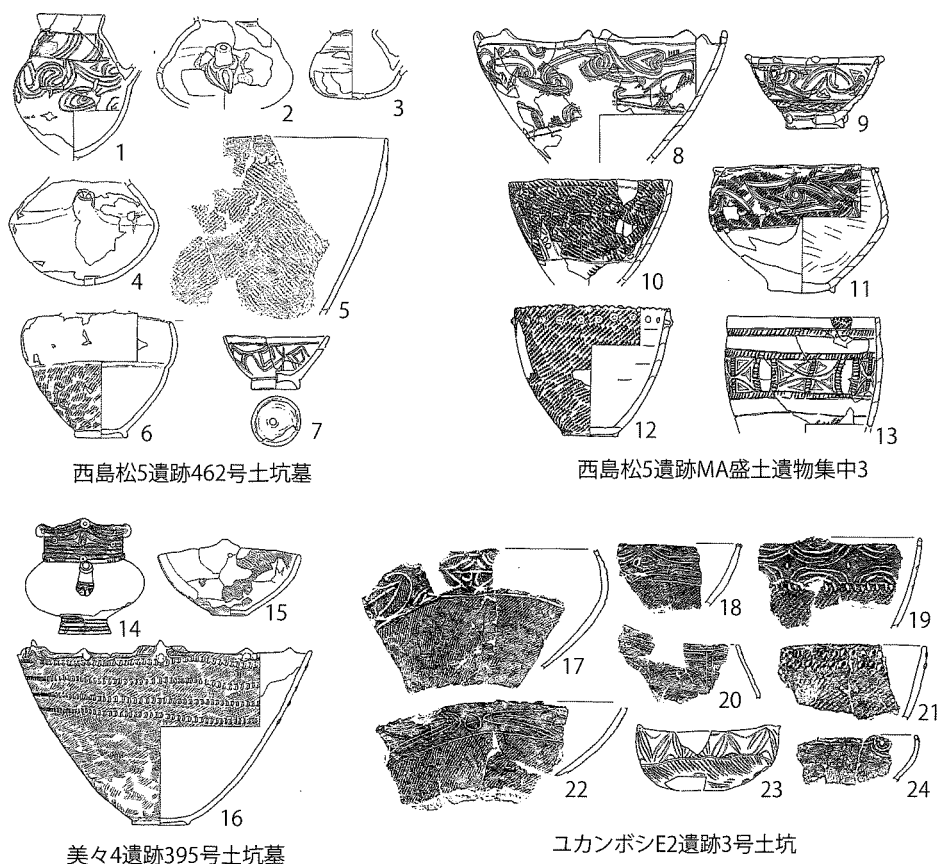


6. 大洞 B 式並行期

(1) 当該期の一括資料とその特徴

大洞 B 式並行期は、瘤付土器第Ⅳ段階並行期の在来の器形と文様を継承、発達させるとともに、亀ヶ岡式の器形と文様を部分的、あるいは変容させながら取り入れている点に特徴がある。一括品、あるいは一括性の高い資料には西島松 5 遺跡 462 号土坑墓出土品、美々 4 遺跡 395 号土坑墓出土品、西島松 5 遺跡 MA 盛土遺物集中 3 出土品、ユカンボシ E2 遺跡 3 号土坑出土品がある(第 14 図)。

在来の文様の特徴は、器種を超えて瘤付土器第Ⅳ段階に広く用いられた孤線文、七宝繫状文、三叉状陰刻、及びこれらを組み合わせた意匠を継承、変形、発達させたもので、そうした文様に蕨手状文、鉤状文があり、両者は一連のものである。蕨手状文を縦に並列し、その文様間に雑描きの文様を付加したのが第 14 図 10 の構図である。末端が鉤状の「<」・「>」状文様を入り組ませ、その両側に三叉状陰刻を配置することで、玉抱き三叉文風を描出したのが第 14 図 11 の基本構図である。第 14 図 8 には、鉤状文を入り組ませることで蕨手状文様を展開する



第 14 図 大洞 B 式並行期の一括資料 (S=1~6・8~23 : 1/8, 7・24 : 1/6)

とともに、鉤状文に「←」状文様を付け加えたり、あるいは三叉状陰刻、弧線文、雑描きの文様を変則的に加えている。第14図1の注口土器の胴部には、蕨手状文や複雑な孤線文が胴部に施されている。その胎土は茶褐色ないし、肌色で、黒色研磨がみられず、北東北地方のものと比較すると精巧さに欠ける。この点は、第14図2~3も同様である。

その一方で、第14図14のように、在来の器形の台付ファロス付注口土器の正面口縁部文様帯に比較的丁寧な玉抱き三叉文が施される場合もある。後述する通り、このような比較的洗練された入組三叉文系土器が看取されるのが美々4遺跡出土品の特徴である。

瘤付土器第Ⅳ段階並行期の孤線文が並線化、あるいは沈線文化するのも当該期の特徴である。第14図9の鉢胴部には、やや粗雑な並線化した孤線文を引っ掛けるように配置したり、文様間のスペースを埋めるように三叉状陰刻を加え、底部近くに横位の綾杉文が充填されている。第14図23の船底形土器の口縁には、沈線文化した木の葉状孤線文がジグザクに配置されている。第14図19の深鉢口縁には、連孤文化した構図が看取される。2単位の相対する孤線文が圧縮されるとともに、文様間の連携がなくなるのが第14図22の構図である。

瘤付土器第Ⅳ段階並行期では、七宝繫状の文様中央に円文や列点文が加えられたものがみられるが(第13a図20・34)、大洞B式並行期では連孤文間や孤線文間の中央に点文、あるいは円文が施文される点に七宝繫状文の痕跡がうかがえる(第14図18・19・22)。第14図17の構図も2単位の相対する磨消文様による孤線文中央に「ハ」字状文を付加している点に七宝繫状文が変形した様子が看取される。

瘤付土器第Ⅳ段階並行期では、2単位の孤線文を相対させることで、そのスペースに菱形文様が形成されるが(第13a図20)、そうした菱形文様が孤線文から独立化し、主文様として並列されているのが第14図7の構図とみられる。

これらの資料を亀ヶ岡式と対比すれば、文様、器形の特徴から西島松5遺跡462号土坑墓出土品、美々4遺跡395号土坑墓出土品、西島松5遺跡MA盛土遺物集中3出土品が大洞B1式並行期に比定される<sup>(9)</sup>。ユカンボシE2遺跡3号土坑は、土坑墓の可能性があり(恵庭市教育委員会2015)、時期的にまとまりのある資料とみられる<sup>(10)</sup>。その出土品は、大洞B2式並行期の注口土器(第14図24)が出土していることから該期に比定されよう。

器種ごとに大洞B式並行期資料の特徴を下記にまとめる。壺・注口土器は、亀ヶ岡式的な器形が増えるが、在来の器形が継承される場合もある(北海道埋蔵文化財センター2004:図V-29-19)。東北地方からの搬入品は、柏原5遺跡出土の薄手で、黒色研磨された注口土器(苫小牧市教育委員会1997:図5-51-275)などを除くと少数とみられる。鉢も壺・注口土器と同様に瘤付土器第Ⅳ段階並行期の文様が踏襲、変形されながら用いられる。

肩部で屈曲する深鉢はほぼ消滅し、有文・無文の砲弾形深鉢が一般的となる。有文の砲弾形深鉢は、口縁部文様帯、あるいは無文帯下に刻目列を加える新たな文様構成が普及していく(第14図5・19)。刻目は、竹管状工具による「D」字状(第14図14・19)、ヘラ状工具によるツメ状(第

14 図 13), マクレ状 (第 14 図 5・16) のものなどがある。竹管状工具による刺突に近いものも看取される。文様帯区画としての刻目列は、継承される (第 14 図 13)。突瘤土器も瘤付土器第 IV 段階並行期から継承される (第 14 図 12)。貼瘤も少数ながら継承される (第 14 図 9・14)。

### (2) 先行研究との編年対比と遺跡による文様・構図に関する変異

大洞 B 式並行期は、土肥 (2001) の VII 期と重複する部分がある。VII 期は、美々 4 遺跡 M-5 墳墓出土品 (北海道教育委員会 1977b) から構成される。後述する通り、M-5 出土品は、主に瘤付土器第 IV 段階並行期、大洞 B2 式並行期の資料を含むので、VI 期と重複する部分があるとともに、VII 期は少なくとも 2 時期に分離される。また、当該期に関するものとして東三川 I 式があるが、7 章で後述する。

当該期は、瘤付土器第 IV 段階並行期に続き、遺跡による文様の変異が看取される。鉤状文や蕨手状文が施文される土器が出土している遺跡 (西島松 5 遺跡、東三川遺跡) とそうでない遺跡があり、その頻度にも差異がある (北海道埋蔵文化財センター 2004、由仁町教育委員会 1969)。特に、西島松 5 遺跡では、土器の出土量が多いためか、その頻度が高い。美々 4 遺跡には、洗練された入組帯状文と三叉文が施された「フクロウ土器」(熊谷 2001: 図 2) に示唆されるように、土器の特色が他遺跡とかなり異なるものも含まれる。美々 4 遺跡には、既述した瘤付土器第 IV 段階並行期の入組帯状文系土器を継承する土器制作者/集団の存在が想定される。

## 7. 編年に関する諸説と検討

これまで北海道中央部における層位的資料や土坑墓出土の一括資料を検討し、縄文時代後期中葉から晩期初頭の編年について提示した。本章では、これらの成果をふまえ、既存の土器型式、及び編年に関する諸説の検討を行う。既述の通り、堂林式→三ツ谷式→御殿山式という後期後葉編年の大枠は定着しつつある。堂林式については、その名称、及び細部については相違があるが、その階梯が数段階にわたることは、共通認識になりつつある。三ツ谷式、御殿山式に関しては、研究者によりその認識が異なる。これらに関連するものとして、柏原 I~IV 式、美々 4 式、東三川 I 式などがある。これらの土器型式には、縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけて時期幅のある遺物包含層資料に基づいて設定されたものもあり、その内容については共通認識が得られず錯綜しているのが現状で、標識資料を含めた学史的整理が必要である。以下、その内容に関する諸説の整理、検討を行う。

### (1) 三ツ谷式

三ツ谷式は、北海道南部に位置する三ツ谷貝塚出土の層位的資料をもとに、その 2 類土器を縄文時代後期終末期として設定されたものである (大場・渡辺 1966)。この層位的資料は、第一混土貝層下部出土資料 (1 類) → 第一混土貝層中部出土資料 (2 類) → 第一混土貝層上部出土資料 (3 類) という縄文時代後期から晩期への大よその流れは追えるが、各層位資料には混在がみられる (鈴木 1999)。1 類は、平行沈線や突瘤を施す深鉢 (大場・渡辺 1966: 図 4-1・4・5・7~9),

マクレ状刻目を施す深鉢(大場・渡辺 1966: 図 4-16~20), 小波状口縁深鉢(大場・渡辺 1966: 図 4-10・12・13)が出土している。深鉢の中には, 平行沈線を斜めに切る沈線文, 斜格子文もあり(大場・渡辺 1966: 図 4-2・9), これらの特徴から, 堂林 3 式~瘤付土器第Ⅲ段階並行期のものとみられる。

2 類は, 瘤付土器第Ⅲ段階並行期を主体とするが(大場・渡辺 1966: 図 5-2~10・13・15・19・21~23), 鮎潤式(大場・渡辺 1966: 図 5-17・18)などの他時期の資料が含まれる。瘤付土器第Ⅲ段階並行期の資料は, 器種を越えて弧線文, 貼瘤, 刻目が多用される。沈線間に刻目を充填する手法(大場・渡辺 1966: 図 5-15・19)や孤線入組文(大場・渡辺 1966: 図 5-22・23)もみられる。

3 類は, 瘤付土器第Ⅲ段階~Ⅳ段階並行期(大場・渡辺 1966: 図 6-6), 大洞 B 式並行期(大場・渡辺 1966: 図 6-1・2), 大洞 BC 式並行期(大場・渡辺 1966: 図 6-12)の資料が含まれる。

2 類から鮎潤式などの他時期の資料を差し引けば, 瘤付土器第Ⅲ段階並行期の資料としてある程度まとまりがみられる。1 類のマクレ状刻目を施す深鉢や小波状口縁深鉢などは, 2 類の瘤付土器第Ⅲ段階並行期の資料に伴う可能性がある。

北海道中央部にも美沢 1 遺跡 JX3 周堤墓 106 号土坑墓出土品(第 12 図 18~24)など, 三ツ谷式に相当する資料が存在することが指摘され, 堂林式→三ツ谷式→御殿山式という縄文時代後期後葉編年の大枠が組まれた(森田 1981)。

鷹野(1989)の三ツ谷式は, ほぼ瘤付土器第Ⅲ段階並行期の資料と同じ内容であるが, 北川<sup>きたがわ</sup>遺跡墓穴出土品, 美々 4 遺跡 395 号土坑墓出土品などの前後する土器が若干含まれる。北川遺跡墓穴出土の注口土器(鷹野 1989: 297-No.23)の器形は第 13a 図 1 に類似する。その文様は注口両側に 2 単位の孤線文と三叉状沈刻を向かい合わせに配置し, 側面には 2 単位の孤線文と三叉状沈刻を背反させ, その文様間のスペースに三叉状沈刻を上下に対置させた構図である。既述の通り, こうした構図は, 北日本~東日本の瘤付土器第Ⅳ段階の注口土器に類例が看取されることから(小林 2010: 図 29), 当該期と判断される。青森県石郷遺跡出土の注口土器(鷹野 1989: 297-No.25)は, 器形, 及び向かい合わせの三叉状陰刻を瘤の両側に充填させる構図の特徴から瘤付土器第Ⅳ段階である(小林 2010: 232)。美々 4 遺跡 395 号土坑墓出土品(鷹野 1989: 297-No.12・24, 第 14 図 14・16 参照)が, 大洞 B1 式並行期であることは既述した。

阿部(2008)の三ツ谷式古・新段階は, 下記のような課題が残る。①堂林式新段階, 及び三ツ谷式古・新段階は, いずれも瘤付土器第Ⅲ段階並行期の資料が主体である。②三ツ谷式新段階と御殿山式古段階に分けた湯の里<sup>湯の里</sup>3 遺跡 C 群土器(阿部 2008: 図 2-51~56)は, 遺物包含層出土ながら瘤付土器第Ⅲ段階並行期のまとまりが看取される資料である(鈴木 1999)。③同氏の御殿山式古・新段階にも瘤付土器第Ⅲ段階並行期資料が少なからず含まれている。この点については, 後述する。

## (2) 御殿山式

当式は、朱円周堤墓の栗沢式とほぼ並行する年代のものとして「静内御殿山式」として初出するとみられる(静内町教育委員会 1954: 41-42)。その後、河野・藤本(1961: 23-26)は、「第1群土器を御殿山Ⅰ式、第2群土器を御殿山Ⅱ式とする」とした。第1群土器(河野・藤本 1961: 図7-1~11・13, 図8-14・15)は堂林式などを含む。第2群土器(河野・藤本 1961: 図7-12<sup>(11)</sup>, 図8-16~23)は、瘤付土器第Ⅳ段階並行期やそれに先行する資料を含む。一方、藤本(1961: 55)の論考では、「第3号墳に副葬されてあった土器(主として第2群土器)をタイプとして呼称されている御殿山式土器」とある(第13b 図1~4 参照)。河野・藤本(1961)の論考では、御殿山Ⅰ・Ⅱ式があり、かなり時期幅がある。藤本(1961)の論考では、瘤付土器第Ⅳ段階並行期として時期が限定されることになる。

御殿山遺跡の報告書が未公開なことも一因とみられるが、今日では、御殿山式は研究者によりその時空間的位置づけは様々である。御殿山遺跡の報告当初から、第2群土器は安行1式~3a式に類似点があるとされ、縄文時代後期末、あるいは晩期初頭に位置づけられていた(河野・藤本 1961: 27, 静内町教育委員会 1954: 42)。近年でも御殿山式は縄文時代後期末~晩期初頭の土器群とする見解がみられる(関根 2007, 福田 2003)。関根(2007)は、カリンバ3遺跡出土品をもとに御殿山Ⅱ式は後期末と晩期初頭(晩期1a期)に細分可能とする。関根(2007: 図8)の「後期末」は瘤付土器第Ⅲ段階並行期に位置づけられるカリンバ3遺跡30・80・111号土坑墓出土品(第12 図1~11)、瘤付土器第Ⅳ段階並行期に位置づけられるカリンバ3遺跡118号土坑墓出土品(第13a 図24~27)を含むので2時期に分離される。また、晩期1a期の標本図の多くは、遺物包含層出土品で、瘤付土器第Ⅲ段階並行期(関根 2007: 図8-31)、瘤付土器第Ⅳ段階並行期(関根 2007: 図8-33・37)の資料を含む。関根(2012)は、その後、北海道中央部の晩期1a期には東三川Ⅰ式古段階を相当させている。この評価については、後述する。

鷹野(1989)の御殿山式は、ほぼ瘤付土器第Ⅳ段階並行期と同じ内容であるが、前後する土器が若干含まれる。既述の通り、湯の里3遺跡出土品(鷹野 1989: 297 頁 No.27・28・38)は、瘤付土器第Ⅲ段階並行期である。美沢1遺跡出土品(鷹野 1989: 297 頁 No.50)は、大洞B式並行期である<sup>(12)</sup>。

阿部(2008)は、御殿山式を古・新段階に分け、その古段階は柏原Ⅲ式の大部分、新段階は柏原Ⅳ式を相当させる。この細分案は、後述する柏原式編年案に依拠したため、御殿山式古・新段階ともに瘤付土器第Ⅲ段階並行期(阿部 2008: 図2-78・79・80・81・85・92・93・94)と瘤付土器第Ⅳ段階並行期(阿部 2008: 図2-87~90・96~98)の資料が含まれている。

このように、御殿山式は研究者により幅広い意味で使われているので、依拠する基準資料の提示と定義が必要であろう。既述の通り、御殿山遺跡3号配石墓出土品は、瘤付土器第Ⅳ段階並行期の一括資料である。北海道東部の並行する資料は、朱円周堤墓A号1号墓出土品であり、当該地域の資料については、栗沢式が用いられることが多い。栗沢式を用いる場合は、御殿山

式と時空間的にどのように違うのか、説明されるべきであろう。

### (3) 美々4式

美々4式は、美々4遺跡と美沢1遺跡の墳墓出土品、及び同遺跡包含層資料をもとに設定された(林1983)。美々4式は、当初、晩期初頭の土器型式として設定され(林1983)、その後、設定者自身によりその存在が撤回されたが(林1998)、その標識資料とされた美々4遺跡と美沢1遺跡の墳墓出土品、及び同遺跡包含層資料は、時期幅があるにもかかわらずいまだに単一時期とする説もみられる。本稿では、土器の時期比定が可能な有文土器が出土し、型式名の由来となった美々4遺跡M-3～M-7墳墓付近出土資料を検討対象とし、同遺跡包含層資料は検討対象外とする。なお、美々4遺跡における「M」とは、火山灰を人為的に盛り上げたマウンドの呼称で、M-2、M-3、M-4、M-6から人骨、あるいはその痕跡が確認され、墳墓であることが判明しているが、M-1、M-5、M-7から人骨は出土していない(北海道教育委員会1977b)。

M-3からは、瘤付土器第Ⅳ段階並行期に特徴的な入組文を施した浅鉢が出土している(北海道教育委員会1977b：図100-1)。M-5出土品は、瘤付土器第Ⅳ段階並行期の深鉢(北海道教育委員会1977b：図103-2)と壺・注口土器(北海道教育委員会1977b：図103-4・5・13～15)、大洞B2式並行期の鉢(北海道教育委員会1977b：図103-7)と注口土器(北海道教育委員会1977b：図103-12)の少なくとも2時期の資料が含まれる。M-5下位の層準であるM-5下からは、大洞B2式の広口壺(北海道教育委員会1977b：図105-1)が出土している。このようにM-5では、瘤付土器第Ⅳ段階並行期の土器が上位の層準から、大洞B2式並行期の土器が下位の層準から出土し、層位的な逆転現象が認められる(鷹野1989)。M-6からは、瘤付土器第Ⅳ段階並行期の広口壺(北海道教育委員会1977b：図102-2)、大洞B2式並行期の鉢(北海道教育委員会1977b：図102-1)が出土している。M-7からは、瘤付土器第Ⅳ段階並行期の広口壺が出土している(北海道教育委員会1977b：図99-6)。

このように美々4式は、瘤付土器第Ⅳ段階並行期～大洞B2式並行期資料を含むことと、基準資料となったM-5出土品には層位的な逆転現象が認められることから、その有効性はない(鷹野1989、林1998)。むしろ、これらの土器を用いた儀礼が墳墓付近で複数時期にわたり行われたことを示し、その遺跡形成過程を理解する上で重要である。

### (4) 柏原Ⅰ～Ⅳ式

柏原Ⅰ～Ⅳ式は、縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけて時期幅のある柏原5遺跡2B層包含層資料をもとに設定されたものである(工藤2000)。柏原Ⅰ式は、堂林3式～瘤付土器第Ⅲ段階並行期(工藤2000：図1-12・14～17、図2-19～24・32)が主体で、縄文時代後期中葉の注口(工藤2000：図2-31)なども含まれる。柏原Ⅱ式には、堂林1式(工藤2000：図2-45)、瘤付土器第Ⅲ段階並行期(工藤2000：図2-37～41)が含まれる。柏原Ⅲ式(工藤2000：図3)は、瘤付土器第Ⅲ段階並行期としてまとまりがみられる。柏原Ⅳ式には、瘤付土器第Ⅲ段階並行期(工藤2000：図4-71・75・79・80・82・83)、瘤付土器第Ⅳ段階並行期(工藤2000：図4-77・85・

92・93), 大洞 B1 式並行期(工藤 2000: 図 4-76)<sup>(13)</sup>が含まれる。このように, 柏原式はそのⅢ式は有効性があるが, I・Ⅱ・Ⅳ式の有効性を認めるのは困難である。こうした点を勘案すれば, 柏原Ⅲ式だけを単独で用いることは適切でなからう。

#### (5) 東三川Ⅰ式

東三川遺跡 1964~1966 年調査資料は, A 群土器(深鉢を主体とする突瘤土器), B 群土器(深鉢を主体とする刺突文土器), C 群土器(浅鉢, 壺を主体とする精製土器), D 群土器(三叉文が施された精製土器), E 群土器(沈線文や磨消縄文の有文土器), F 群土器(雲形文土器), G 群土器(撚糸を口縁に押圧した続縄文前半の土器), H 群土器(沈線文などの有文土器), I 群土器(縄文地文の粗製土器)に分類された(由仁町教育委員会 1969)。東三川Ⅰ式は, A 群~E 群土器がほぼ共伴関係にあるとし, 設定された(由仁町教育委員会 1969: 52)。また, 東三川Ⅱ式は F 群土器をもとに大洞 C1 式に並行する土器型式, 東三川Ⅲ式は G・H 群土器をもとに続縄文時代初頭の土器型式として設定された。

これらの土器群(A 群~I 群)に関しては, 混在のような形で出土し, 確実な土器の型式的変遷といったものを層位的に把握するまでには至らなかったとされる(由仁町教育委員会 1969: 32・51)。東三川Ⅰ式を大洞 B 式並行とした根拠は, D 群土器にみられる三叉文は大洞 B 式土器の特徴と判断されたためである(由仁町教育委員会 1969: 53)。今日の研究状況では, D 群土器(由仁町教育委員会 1969: 図 14-29~38)のほとんどは, 後期三叉文(小林 2010: 70-79)が施文されているとみられる。C 群土器の中には, 瘤付土器第Ⅳ段階並行期の孤線文を施す浅鉢(由仁町教育委員会 1969: 図 14-18), 蕨手状文と三叉状沈刻を施す大洞 B1 式並行期の注口土器(由仁町教育委員会 1969: 図 14-14・15)などが含まれる。E 群土器は, 晩期前葉の在地的な文様を施す土器が主体を占めるが, 瘤付土器第Ⅲ段階, あるいはⅣ段階並行期の資料(由仁町教育委員会 1969: 図 15-20)も含まれる。以上の点を踏まえると, A 群~E 群土器は, 縄文時代後期後葉~晩期前葉の資料が含まれ, その共伴関係を認めることは困難である。上述した層位的所見は, こうした状況を裏付けるものであろう。

同遺跡の 2009 年調査 E 地区出土品にも瘤付土器第Ⅲ段階並行期(由仁町教育委員会 2011: 図 23-48~50, 図 24-63), 瘤付土器第Ⅳ段階並行期(由仁町教育委員会 2011: 図 22-29, 図 24-68, 図 26-91)と大洞 B2 式並行期(由仁町教育委員会 2011: 図 26-90)の資料が含まれ, 時期的に幅がある。これらの点を考慮すれば, 東三川Ⅰ式という名称が縄文時代晩期初頭の土器型式として妥当かどうか再検討されるべきであろう。

佐藤(2008・2010)は, 西島 5 遺跡 MA 盛土遺物集中 1~5・9 出土品とカリンバ 3 遺跡 82 号土坑墓出土品を東三川Ⅰ式古段階, 西島松 5 遺跡 B・C-15 グリッド出土品を新段階に細分し, 前者を大洞 B1 式並行, 後者を大洞 B2 式並行としている。既述の通り, 西島松 5 遺跡 MA 盛土遺物集中 3 は, 大洞 B1 式並行期の資料と判断される。西島松 5 遺跡 B・C-15 グリッド出土品には, 大洞 B1 式並行期(北海道埋蔵文化財センター 2004: 図Ⅳ-38-180・184・185 など)

と大洞 B2 式並行期(北海道埋蔵文化財センター 2004: 図 IV-36-165)の 2 時期の資料が含まれる。

関根(2012)は、佐藤(2008・2010)の東三川 I 式の内容を拡大し、N30 遺跡 8・9 層出土品は東三川 I 式古段階の一括資料、柏原 IV 式は東三川 I 式古段階とほぼ同じ内容とみなす。N30 遺跡 8・9 層出土品には、瘤付土器第 IV 段階並行期の深鉢(札幌市埋蔵文化財センター 1998: 図 119-7, 図 120-15)と堂林式的な平行沈線文を施す深鉢(札幌市埋蔵文化財センター 1998: 図 118-1・2)が含まれる<sup>(14)</sup>。N30 遺跡 8・9 層出土品は、瘤付土器第 IV 段階並行期と堂林式的な平行沈線文を施す土器の相伴関係、すなわち堂林式的な土器がいつまで継承されるのかという課題が残り、その一括性についてはさらに今後、検証が必要とされる。柏原 IV 式の有効性を認めるのは困難であることは、既述した。

## 8. 結語

本稿の前半では、北海道中央部を中心とした縄文時代後期中葉後半期から晩期初頭の編年について提示し、後半では、編年に関する諸説を批判的に検討することで研究史を整理した。本研究の成果を表 1 に示す。本研究により北海道中央部における当該期編年は、かなり整理されたことになる。本稿で分析対象とした資料の性格は様々で、分析と当該期編年の精度に関与する。縄文時代後期中葉後半期に関しては忍路土場遺跡の層位的資料と近年の蓄積された資料により精度の高い編年の再構築が可能となった。ただし、忍路土場遺跡出土品は層位的資料とはいえ、各層準には混在が認められるので、良好な一括資料により検証を行うことで編年や土器型式に関する同定の精度を高めていく必要がある。堂林式の古い段階は、キウス 4 遺跡の調査によりその様相が明らかになったが、堂林 1 式の一括資料は同遺跡建物 19 出土品に限られるので、器種組成を解明することや、その内容を一層明らかにすることが今後の課題である。こうした点を検討するうえで、キウス 4 遺跡盛土下位層準における土器一括(廃棄集中箇所)出土品などの再精査や再検討が期待される。堂林 2 式は一括資料が欠如しており、器種組成の解明、及び堂林 1・2 式の細分やその判別方法が今後の課題である。縄文時代後期後葉後半期～晩期初頭の編年は、層位的資料を欠く一方で、墓坑出土の一括資料により、精度の高い編年の再構築が可能となった。ただし、晩期初頭の在出土器の文様・器形は多様であるとともに、遺跡による大きな変異が看取され、今後さらに詳細な分析が必要である。

本研究による編年再構築の応用は、下記のように多岐にわたる。第一に、住居跡、及び土坑墓の時期比定に有効であることから、集落遺跡、墓地遺跡の時空間的な動態をより正確に把握することが可能となる。北海道中央部の当該期、とりわけ縄文時代後期後葉後半期から晩期の土坑墓からは供献、副葬された土器の事例が豊富であることから、墓域の形成過程をより正確に把握することが可能になるとともに、土坑墓の編年構築に有効である。また、周堤墓の編年構築やその遺跡形成過程についても有効性を発揮するであろう。

第二に、北海道中央部からは、墓坑出土の漆製品、玉類、石製品など縄文社会の進化を検討



第1表 北海道中央部を中心とする縄文時代後期中葉後半期から晩期初頭の土器編年と代表的な資料

阿部 (2008)	土肥 (2001)	本稿	北海道中央部	北海道北部	北海道東部
—	—	手稲1式	ユカンボシ E3B 地点3号住	船泊(一部)	
—	—	手稲2式	忍路土場 3rd	船泊(一部)	オクシベツ川(一部)
—	—	手稲3式	忍路土場Ⅲ d・Ⅲ c層		
鮎潤式新(末) 段階/エリモB式	I期	鮎潤式	(古段階)忍路土場Ⅲ a層 (新段階)末広 52号住		
鮎潤式新(末) 段階/エリモB式	II期	堂林1式	キウス4建物 19		オクシベツ川(一部)
堂林式古段階	III期	堂林2式	柏木川4(一部)		オクシベツ川(一部)
堂林式中段階	IV期	堂林3式	キウス4盛土上位層準(一部)	浜中2 V層	オクシベツ川(一部)
堂林式新段階～ 御殿山式	V期	瘤付土器第Ⅲ段 階並行期	第12図参照	浜中2 V層(一部)	オクシベツ川(一部)
御殿山式	VI期～ VII期	瘤付土器第Ⅳ段 階並行期	第13a・b図参照		朱田周堤墓 A号1号 墓, 北川墓穴
—	VII期	大洞B式並行期	第14図参照		

\*先行研究との編年対比については、異同があり、本文を参照されたい。

するための最も重要な資料が出土している。これらの精度の高い時期比定が土器との共伴関係を検討することで可能になり、縄文社会の進化を検討するための基礎的データを提供することとなる。また、本稿で展開した土器の文様分析は、細形石棒に装飾された文様の分析にも有効であり、細形石棒の時期を比定できる事例もある(坂口2014)。土坑墓における細形石棒と土器の共伴関係を検討することで、細形石棒の編年構築にも有効である。

第三に、当該期の編年が再構築されたことで、周堤墓形成期における土器製作の地域性も明らかになってきた。こうした地域性は、瘤付土器第Ⅲ段階並行期～大洞B式並行期にかけて顕著になる傾向が看取される。縄文時代後期後葉から晩期前葉にかけて、それぞれの地域集団にかかわる土器制作者/集団の存在が想定される。北海道中央部では、壺・注口土器を供献、あるいは埋葬儀礼に用いるのは縄文時代後期中葉以来の伝統であり、こうした埋葬儀礼に土器制作者/集団も関与していたであろう。そのピークは事例の多さから瘤付土器第Ⅲ・Ⅳ段階並行期にあると推定される。葬送儀礼は地域集団の威信を示す場でもあるから(Hayden 2009)、威信技術としての土器製作技術を保持する当該期における土器制作者/集団の社会経済的役割は大きかったであろう。周堤墓形成期の背景にあるポリティカル・エコノミーを支える工芸集団としての土器制作者/集団の存在を視野に入れるべきであろう。

また、瘤付土器第Ⅲ段階並行期～大洞B1式並行期にかけて、大きく太平洋側と内陸側で文様の表現や選択に関する地域性が看取された。瘤付土器と亀ヶ岡式の文様・手法を部分的にはあるが直接的に取り入れる土器制作者/集団と間接的、あるいは大きく変容させる土器制作者/集団の存在を予測させる。こうした現象は、東北地方からの土器搬入品の粗密とも関係す

るものであろう。北海道中央部の太平洋側には、既述した柏原5遺跡出土の亀ヶ岡式に示唆されるように、北東北地方からの搬入品が少数ながら分布する傾向がみられる。物質文化の搬入品に関する分布の粗密は地域集団間の社会的関係を示すので (Trubitt 2003), 特に北東北地方の地域集団と北海道中央部太平洋側の地域集団との関係が示唆される。こうした背景をもとに両地域集団のアイデンティを継承する社会的にハイブリッドな個人／集団の存在も想定されよう。また、上述した土器の地域性、土器搬入品の粗密や遺跡の立地は、当該期の海岸部から内陸への交易ルートとそれらをめぐる地域集団間のポリティカル・エコノミーが関与していたと予察される。

当該期の土器研究は、精度の高い編年をもとに周堤墓形成期における地域集団の形成やポリティカル・エコノミーにアプローチする方法となりうる。本研究成果の応用を次に展開していくこととし、本稿を閣筆する。

#### 註

- (1) ただし、同報告書中の周堤墓一覧では、キウス4遺跡の周堤墓の時期は、堂林式期とされている (北海道埋蔵文化財センター 2003b: 75-76)。キウス4遺跡の発掘調査関係者の間でも編年、及び周堤墓の時期比定に関しては意見の相違がみられるようである。
- (2) 以下、文様帯、及びその記号については山内清男 (1964) に準拠する。
- (3) 手稲遺跡からは、後述する手稲式の前段階 (第3a 図9, 大場・石川 1956: 図12 上端2点の波状口縁深鉢), 中段階 (第3a 図5), 新段階 (大場・石川 1956: 図25・26の大多数) が出土している。手稲遺跡出土品は、手稲記念館で所蔵展示されている。同館では完形、半完形を中心とする資料が所蔵され、その中には『手稲遺跡』(大場・石川 1956) には未報告の資料も含まれる。同館のご厚意により実見させていただいた。なお、幣舞式注口土器については、高瀬克典氏からご教示いただいた。
- (4) 2nd 出土品は、本文で既述の通り、Ⅲc 層に由来する手稲3式が混在している可能性があるため、忍路土場遺跡Ⅲa 層出土品を鮎澗式の標識資料に位置づけたい。
- (5) 盛土S層出土品の層位については、報告書の本文・図と表に一部齟齬がみられる (北海道埋蔵文化財センター 1998b)。本稿では、本文・図の層位に依拠している。
- (6) 直立した注口を陰茎とみため、その下部に陰囊が表現されていると判断できるものをファロス付注口土器と呼称する (坂口 2013)。
- (7) 西島松5遺跡 506号土坑墓には、第13a 図20・21が供献され、共伴関係にあると判断されることから図を掲載している。同土坑墓から出土した広口壺 (北海道埋蔵文化財センター 2009: 図126-7) は、その破片のほとんどが遺構確認以前の遺物包含層から発見されていることから (北海道埋蔵文化財センター 2009: 80), 本稿では検討対象外としている。
- (8) 本資料については、小林圭一氏からご教示いただいた。
- (9) 美々4遺跡 395号土坑墓出土品については、小林圭一・中門亮太氏からご教示いただいた。
- (10) 第14 図18と22, 第14 図17と『恵庭市内遺跡発掘調査等報告書1』(恵庭市教育委員会 2015) 図Ⅱ-20-12, 第14 図20と同報告書図Ⅱ-19-6は接合しないが、それぞれ同一個体である。恵庭

市教育委員会のご厚意により実見した。第14図22は底面、第14図17・18・23は覆土下位、第14図19～21は覆土上位、第14図24は覆土（一括）出土で（恵庭市教育委員会2015）、时期的にまとまりのある資料とみられる。

- (11) 河野・藤本（1961）は、23頁で既に「第1群土器（図7-1～11）」としているため、「第2群土器（図7-5～12、図8-16～23）」の「図7-5～12」は、図7-12の誤記とみられる。本稿では、図7-12で解釈する。
- (12) 本資料については、小林圭一・中村大氏からご教示いただいた。
- (13) 本資料については、小林圭一氏からご教示いただいた。
- (14) 『N30遺跡』（札幌市埋蔵文化財センター1998）図119-7には、瘤付土器第Ⅳ段階並行期に特徴的な七宝繫状文が施されている。同報告書図120-15の主要モチーフは、三叉状陰刻を対置させることで描出された楕円文に縦位列点文を付加し、周りに七宝繫状の磨り消された弧線文（磨り消しが不十分な箇所もある）を展開させている。さらに主要モチーフ両側の2段の円状文様周囲に三叉状陰刻・沈刻を巡らせることで、連続的かつ副次的なモチーフを造形している。主要モチーフ、副次的なモチーフともに規則性がみられず変則的である。こうした楕円文の両側に三叉状陰刻を対置させるモチーフや円状文様周囲に三叉状陰刻・沈刻を巡らせる手法は、瘤付土器第Ⅳ段階に広く用いられる手法であることから（小林2010：図29；第13a図22・32・34、第13b図9参照）、当該期と判断される。ただし、七宝繫状の弧線文が閉じ気味で扁平化している点などに大洞B1式並行期への過渡的様相もうかがえる。

#### 謝辞

本稿作成につきまして、下記の諸氏・機関からは多くのご教示をいただくとともに、資料見学、文献収集につきまして大変お世話になりました（敬称略・五十音順）。特に、小林圭一氏には、縄文時代後期中葉から晩期の土器研究につきまして多くのご教示をいただきました。末筆ながら御礼申し上げます。赤石慎三、乾芳宏、石神敏、右代啓視、上屋真一、小川直章、木村英明、小杉康、斉藤大朋、坂本尚史、佐藤剛、澤田憲且、澤村寛、菅原直、鈴木琢也、高倉純、高瀬克典、田口尚、高橋理、高橋龍三郎、中村大、中門亮太、長町章弘、平河内毅、平原信崇、藤井浩、松田功、村本周三、恵庭市教育委員会、足寄動物化石博物館、小樽市教育委員会、小樽市総合博物館運河館、札幌大学埋蔵文化財展示室、斜里町立知床博物館、新ひだか町静内郷土館、千歳市埋蔵文化財センター、手稲記念館、苫小牧市美術博物館、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、北海道大学北方文化論講座、北海道大学埋蔵文化財調査センター、北海道博物館、北海道埋蔵文化財センター、由仁町教育委員会、よいち水産博物館

なお、本研究は科研費基盤研究(c)「周堤墓の出現に関する考古学的研究」(課題番号17K03201)のもとに行われた研究成果の一部である。

#### 引用文献

- 旭川市教育委員会 1992『神居古潭7遺跡』旭川市埋蔵文化財発掘調査報告第14号、旭川  
 旭川市教育委員会 1993『神居古潭7遺跡2』旭川市埋蔵文化財発掘調査報告第15号、旭川  
 旭川市教育委員会 1995『神居古潭7遺跡4』旭川市埋蔵文化財発掘調査報告第19号、旭川  
 阿部明義 2008「堂林式・御殿山式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション、東京、560-567頁  
 恵庭市教育委員会編 1981『柏木B遺跡』恵庭市教育委員会、恵庭

- 恵庭市教育委員会編 1992『ユカンボシ E3 遺跡 B 地点』恵庭市教育委員会, 恵庭
- 恵庭市教育委員会編 2003『カリンバ 3 遺跡(1)』恵庭市教育委員会, 恵庭
- 恵庭市教育委員会編 2004『カリンバ 3 遺跡(3)』恵庭市教育委員会, 恵庭
- 恵庭市教育委員会編 2015『恵庭市内遺跡発掘調査等報告書 1』恵庭市教育委員会, 恵庭
- 大場利夫・石川 徹 1956『手稲遺跡』手稲町, 手稲
- 大場利夫・石川 徹 1967『千歳遺跡』千歳市教育委員会, 千歳
- 大場利夫・扇谷昌康 1953『エリモ遺蹟』日高教育研究所, 浦河
- 大場利夫・渡辺兼庸 1966「北海道爾志郡三ツ谷貝塚」『考古学雑誌』51 卷 4 号, 日本考古学会, 東京, 13-27 頁
- 河野広道 1981「斜里町栗沢台地の調査」『河野広道ノート考古編 1 北海道東北部の考古学的調査』北海道出版企画センター, 札幌, 118-131 頁
- 河野広道・藤本英夫 1961「御殿山墳墓群について」『考古学雑誌』46 卷 4 号, 日本考古学会, 東京, 15-33 頁
- 工藤 肇 2000「柏原 I~IV 式土器について—柏原 5 遺跡出土の縄文後期後葉の土器を主体に」『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報』2 号, 苫小牧市埋蔵文化財調査センター, 苫小牧, 9-28 頁
- 熊谷仁志 2001「『フクロウ』意匠の貼付が施された土器」『北海道立埋蔵文化財センター年報 平成 13 (2001) 年度』北海道立埋蔵文化財センター, 江別, 55-61 頁
- 国立歴史民俗博物館編 2000『浜中 2 遺跡発掘調査報告書』国立歴史民俗博物館研究報告 85 集, 佐倉
- 国立歴史民俗博物館編 2001『落合計策縄文時代遺物コレクション』国立歴史民俗博物館, 佐倉
- 小林圭一 2010『亀ヶ岡式土器成立期の研究—東北地方における縄文時代晩期前葉の土器型式』早稲田大学総合研究機構先史考古学研究所, 東京
- 小林圭一 2015「国宝「合掌土偶」の編年の位置—風張(1)遺跡第 15 号竪穴住居跡出土土器の検討を通して」『研究紀要』14, 東北芸術工科大学東北文化研究センター, 山形, 23-104 頁
- 坂口 隆 2013「縄文時代の男性的シンボルに関する基礎的研究—ファロス付注口土器の展開(上)」『考古学雑誌』97 卷 3 号, 日本考古学会, 東京, 1-26 頁
- 坂口 隆 2014「キウス周堤墓群の出現と遺跡形成過程」『日本考古学協会 2014 年度伊達大会 研究発表資料集』日本考古学協会, 伊達, 609-631 頁
- 札幌市埋蔵文化財センター編 1998『N30 遺跡』札幌市教育委員会, 札幌
- 佐藤 剛 2008「東三川 I 式・上ノ国式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション, 東京, 694-699 頁
- 佐藤 剛 2010「北海道島における縄文時代晩期初頭の土器様相—恵庭市西島松 5 遺跡出土の東三川 I 式土器の検討から—」『北杜—辻秀人先生還暦記念論集—』辻秀人先生還暦記念論集刊行会, 仙台, 1-16 頁
- 静内町教育委員会編 1954『静内町先史時代遺跡調査報告』静内町役場, 静内
- 静内町教育委員会編 1984『御殿山遺跡とその周辺における考古学的調査—静内町遺跡分布調査報告書』静内町, 静内
- 鈴木克彦 1999「北海道渡島・桧山地域の後期後半の編年北海道西南部の縄文後期の編年学的研究 3」『古代』107 号, 早稲田大学考古学会, 東京, 43-63 頁
- 関根達人 2007「大洞系・類大洞系・非大洞系土器の検証—道南・道央における縄文晩期初頭の土器型式構造」『考古学談叢』六一書房, 東京, 287-312 頁
- 関根達人 2012「北海道晩期縄文土器編年の再構築」『北海道考古学』48 号, 北海道考古学会, 札幌,

33-52 頁

- 関根達人 2013 「土器の編年」『青森県史資料編考古2 縄文後期・晩期』青森県, 青森, 8-21 頁
- 鷹野光行 1978 「北海道における縄文時代後期中葉の土器の編年について」『考古学雑誌』63 卷 4 号, 日本考古学会, 東京, 339-354 頁
- 鷹野光行 1981 「北海道の土器」『縄文文化の研究 4 卷一 縄文土器 2』雄山閣, 東京, 114-122 頁
- 鷹野光行 1982 「鯨潤式と「ホッケマ式」」『古代』73, 早稲田大学考古学会, 東京, 47-52 頁
- 鷹野光行 1989 「御殿山式土器様式」『縄文土器大観 4 後期・晩期・続縄文』小学館, 東京, 295-298 頁
- 高橋龍三郎 1981 「亀ヶ岡式土器の研究一青森県南津軽郡浪岡町細野遺跡の土器について」『北奥古代文化』第 12 号, 北奥古代文化研究会, 東京, 1-51 頁
- 千歳市教育委員会編 1982 『末広遺跡における考古学的調査(下)』千歳市教育委員会, 千歳
- 千歳市教育委員会編 1994 『丸子山遺跡における考古学的調査』千歳市教育委員会, 千歳
- 土肥研晶 2001 「編年」『キウス 4 遺跡 8』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 157 集, 札幌, 408-412 頁
- 苫小牧市教育委員会編 1997 『柏原 5 遺跡』苫小牧市教育委員会, 苫小牧
- 名取武光・松下 亘 1969 「北海道」『新版考古学講座 3 卷一 先史文化』雄山閣, 東京, 181-202 頁
- 野口義磨・安孫子昭二 1981 「磨消縄文の世界」『縄文土器大成 3 後期』講談社, 東京, 130-135 頁
- 八戸市教育委員会編 1986 『丹後谷地遺跡』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第 15 集, 八戸
- 八戸市教育委員会編 1988a 『田面木平遺跡(1)』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第 20 集, 八戸
- 八戸市教育委員会編 1988b 『丹後平遺跡(2)・丹後谷地遺跡(4)・笹子遺跡(3)』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第 27 集, 八戸
- 林 謙作 1983 「美々 4 式の構成」『考古学論叢 1』東出版寧楽社, 東京, 273-307 頁
- 林 謙作 1998 「美々 4 式の再検討」『北海道考古学』34, 北海道考古学会, 江別, 122 頁
- 福田正宏 2003 「北海道における亀ヶ岡式土器と在地系土器の系統」『海と考古学』5 号, 海交史研究会, つくば, 19-52 頁
- 藤本英夫 1961 「御殿山ケールン群墳墓遺跡について」『民族学研究』26 (1), 日本民族学会, 東京, 47-57 頁
- 藤本英夫 1963 『Gotenyama : Plates』静内町教育委員会, 静内
- 北海道教育委員会編 1977a 「美沢 1 遺跡」『美沢川流域の遺跡群 1』北海道教育委員会, 札幌, 29-102 頁
- 北海道教育委員会編 1977b 「美々 4 遺跡」『美沢川流域の遺跡群 1』北海道教育委員会, 札幌, 103-194 頁
- 北海道教育委員会編 1978 『美沢川流域の遺跡群 2』北海道教育委員会, 札幌
- 北海道教育委員会編 1979a 「美々 4 遺跡(呑口)」『美沢川流域の遺跡群 3』北海道教育委員会, 札幌, 13-62 頁
- 北海道教育委員会編 1979b 「美沢 1 遺跡」『美沢川流域の遺跡群 3』北海道教育委員会, 札幌, 365-501 頁
- 北海道教育委員会編 1981 「美々 4 遺跡」『美沢川流域の遺跡群 4』北海道埋蔵文化財調査報告書第 3 集, 札幌, 19-240 頁
- 北海道埋蔵文化財センター編 1984 『美沢川流域の遺跡群 7』北海道埋蔵文化財センター調査報告第 14 集, 札幌

- 北海道埋蔵文化財センター編 1986『湯の里3遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告第32集, 札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 1989a『忍路土場遺跡・忍路5遺跡第1分冊』北海道埋蔵文化財センター調査報告第53集, 札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 1989b『忍路土場遺跡・忍路5遺跡第2分冊』北海道埋蔵文化財センター調査報告第53集, 札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 1989c『忍路土場遺跡・忍路5遺跡第3分冊』北海道埋蔵文化財センター調査報告第53集, 札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 1998a『美沢川流域の遺跡群19』北海道埋蔵文化財センター調査報告第113集, 札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 1998b『キウス4遺跡2』北海道埋蔵文化財センター調査報告第124集, 札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 1999a『キウス4遺跡3』北海道埋蔵文化財センター調査報告第134集, 札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 1999b『キウス4遺跡5』北海道埋蔵文化財センター調査報告第144集, 札幌
- 北海道埋蔵文化財センター編 2001『キウス4遺跡8』北海道埋蔵文化財センター調査報告第157集, 江別
- 北海道埋蔵文化財センター編 2003a『キウス4遺跡9』北海道埋蔵文化財センター調査報告第180集, 江別
- 北海道埋蔵文化財センター編 2003b『キウス4遺跡10』北海道埋蔵文化財センター調査報告第187集, 江別
- 北海道埋蔵文化財センター編 2004『西島松5遺跡3』北海道埋蔵文化財センター調査報告第209集, 江別
- 北海道埋蔵文化財センター編 2009『西島松5遺跡6』北海道埋蔵文化財センター調査報告第260集, 江別
- 北海道埋蔵文化財センター編 2010『柏木川4遺跡4』北海道埋蔵文化財センター調査報告第264集, 江別
- 北海道埋蔵文化財センター編 2012『斜里町斜里朱円周堤墓』北海道立埋蔵文化財センター, 江別
- 森田知忠 1981『北海道』『縄文土器大成3後期』講談社, 東京, 136-138頁
- 山内清男 1964『文様帯系統論』『日本原始美術I縄文式土器』講談社, 東京, 157-158頁
- 由仁町教育委員会 1969『由仁町東三川遺跡』『北海道由仁町の先史遺跡』由仁町教育委員会, 由仁, 27-58頁
- 由仁町教育委員会 2011『東三川遺跡』由仁町教育委員会, 由仁
- Hayden, B. 2009. Funerals as feasts: Why are they so important?. *Cambridge Archaeological Journal* 19: 29-52, Cambridge University Press, Cambridge.
- Trubitt, M. B. D. 2003. The production and exchange of marine shell prestige goods. *Journal of Archaeological Research* 11: 243-277. Springer, New York.

## 周堤墓形成期の土器研究

### 図版出典

- 第1図 カシミール3Dを用いて50mメッシュ標高データ(全国)から作成した地図を加工
- 第2a図 北海道埋蔵文化財センター1989b:図1から作成
- 第2b図 北海道埋蔵文化財センター1989b:図2から作成
- 第3a図 鷹野1978:図2-3~11, 図5~8から作成
- 第3b図 鷹野1981:図1-5~23, 図2-1から作成
- 第4図 恵庭市教育委員会1992:図25-1・3・5・6, 図26-8・16から作成
- 第5図 千歳市教育委員会1982:図346-3~6, 図347-1~3, 図348-4, 図349-13・16から作成
- 第6図 北海道埋蔵文化財センター2001:図60-1, 図63-18, 図70-68~70, 図74-119, 図85-276から作成
- 第7図 北海道埋蔵文化財センター2001:図60-4, 図64-22, 図89-368, 北海道埋蔵文化財センター2003a:図V-102-936・940, 図V-103-944, 図V-167-1378, 図V-170-1390から作成
- 第8図 北海道埋蔵文化財センター2010:図Ⅲ-57-土器集中5・7, 図Ⅲ-60, 図Ⅲ-62, 図Ⅲ-65-土器集中20・21, 図Ⅲ-66-土器集中22, 図Ⅲ-67から作成
- 第9図 北海道埋蔵文化財センター1998b:図V-6-48-216・218~220, 図V-6-49-224・227, 図V-6-50-229~231, 図V-6-51-233~235から作成
- 第10図 国立歴史民俗博物館2000:図4-25-109, 図4-39-183, 図4-41-187, 図4-44-223・232・238・241・242から作成
- 第11図 北海道埋蔵文化財センター1999b:図Ⅱ-5-2・3;北海道埋蔵文化財センター2001:図130-970・972, 図131-976・978, 図132-985, 図157-1441・1447;北海道埋蔵文化財センター2003a:図V-75-526・528, 図V-76-531・532, 図V-176-1418・1419から作成
- 第12図 恵庭市教育委員会2003:図17-1~4, 図31-1・2, 図106-1~5;北海道埋蔵文化財センター2009:図48-7~12;北海道教育委員会1979b:図7-25-1~7;北海道教育委員会編1984:図173-1~9;北海道教育委員会1981:図71-1・5, 図78-1・3, 図82-1;恵庭市教育委員会1981:図256-1・2;北海道埋蔵文化財センター1999a:図V-24-1;北海道埋蔵文化財センター2001:図161-1574;北海道埋蔵文化財センター2003a:図V-82-597・598から作成
- 第13a図 北海道教育委員会1977a:図26-P38-1・2;北海道埋蔵文化財センター1984:図125-1~6, 図126-1・2;恵庭市教育委員会2003:図50-1~4, 図79-2・3;北海道埋蔵文化財センター2009:図26-1~6, 図30-104・105, 図35-46・47, 図62-5・6・8, 図122-2・3, 図126-3・8, 図135-43・44, 図152-6・9から作成
- 第13b図 静内町教育委員会1984:図20-2・3, 図21-1・2;北海道埋蔵文化財センター2012:図IV-1-1~3, 図IV-2-4~6から作成
- 第14図 北海道埋蔵文化財センター1984:図184-1~3;北海道埋蔵文化財センター2004:図V-26-8, 図V-27-13~15, 図V-28-16・17;北海道埋蔵文化財センター2009:図101-2~5・8・9・11;恵庭市教育委員会2015:図2-19-1・4~7, 図2-20-9・10・16から作成

(連絡先:北海道大学アイヌ・先住民研究センター)

[2018年(平成30)1月9日受付, 3月2日受理]

**Building a New Pottery Chronology from the Late  
to Final Jomon of Central Hokkaido for Understanding  
the Emergence of *Shuteibo***

By SAKAGUCHI Takashi

This paper presents a new pottery chronology from the middle of the Late Jomon to the Final Jomon of central Hokkaido to better understand the emergence of *shuteibo* (a type of communal cemetery characterized by a circular embankment constructed in the latter half of the Late Jomon) in terms of settlement and household archaeologies. To conduct settlement and household analyses, an accurate chronology of the rise and decline of the cemeteries along with the corresponding village sites is essential to allow us to detect power shifts and relations among regional groups in central Hokkaido. This refined pottery chronology is crucial to understanding the sociopolitical evolution of community organization and household variability involved in the emergence of the communal cemetery.





北海道斜里町朱円周堤墓 A 号 1 号墓出土の土器〔坂口論文参照, No. は第 13b 図に準拠〕  
(斜里町立知床博物館所蔵, 著者撮影)



北海道斜里町朱円周堤墓 A 号 1 号墓出土の土器〔坂口論文参照, No. は第 13b 図に準拠〕  
(斜里町立知床博物館所蔵, 著者撮影)